

戻った俺がやり直す

天チク

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人生もつと簡単だつたらいいのに…そう思う人は多いだろう。それにやり直したい  
ことだつていくらでもあると思う。俺もそうだ。

これは1人の少年が自らの過去をなんだかんだで清算していく話。

ちなみに幼少期からですので初めは俺がいるキャラは出てこないかもです。  
注意書き

この小説は作者の独自の倫理観や固定概念が多大に含まれております。  
かなりの駄文でありますのでご注意ください。  
お願ひ

感想、  
評価ぜひください！

# 目次

白いアイツ	——	——	——	——	——	——	——	——	——
ヤンな奴が狙つてる	——	——	——	——	——	——	——	——	——
後ろのアイツは超ウゼエ	——	——	——	——	——	——	——	——	——
いい子いい子	——	——	——	——	——	——	——	——	——
心ここに在らず	——	——	——	——	——	——	——	——	——
想いは止まらずされど届かず	——	——	——	——	——	——	——	——	——
秘密隠して言葉隠さず	——	——	——	——	——	——	——	——	——
途中から空氣の人物は気づいた時には既にフェードアウトしてるもの	——	——	——	——	——	——	——	——	——
愛、反する	——	——	——	——	——	——	——	——	——
その道には影がさす	——	——	——	——	——	——	——	——	——
102	86	75	63	50	40	31	18	10	1

# 白いアイツ

気がついたら体が縮んでしまっていた。

何を言つてゐるのか俺もわからないから安心しろ。 ちなみにコナンみたく薬を飲まされたわけじやない。 風呂に入つてたらこうなつたんだ。

わっぶ！

どうやら俺はいま身体を洗われてゐるらしいさつきから顔面に容赦なく水が襲いかかつてくる。 もうちよつと丁寧に洗えやコラ。

誰やねんこんな雑な洗い方してん奴は！

そう思い睨みつけるとあらま！ その見覚えのある顔は…おかあちゃまでしたく！！

つてなんでだよ！ ここはあれじやないの？ テンプレで金髪美人のお母様つて奴じやないの？ 見た目は全然お姉さんに見えるとかそういう奴じやないの？ ねえ、誰か教えて…。

なんで、 なんで俺の母ちゃんなんだああああ！

いやまあ全然嬉しいんですけどね。 え？ さつきまでと反応が違う？ 何言つてんだよいきなり知らない人に身体を弄られるなんて嫌に決まつてんだろ。 それならまだ

母ちゃんの方がマシだ、なんたつて赤子だ洗われて当然だ。これがさつき言つた金髪美人だつたら羞恥心で死ねるけど自分の母親じやあねえ…。

あ、洗い終わつた。

わっふ！ だから優しくして!? もつと包み込むような感じで顔を拭いて！ 荒々しすぎるわ!!

顔面に訪れる脅威に耐えながら俺は一つの結論を出していた…これ転生やない、逆行や。

あの日から数年が流れた。時が経つの早いというがその通りであり俺もいまは立派な幼稚園児で4歳だ。タケノコ保育園の梅組に入つている。

ここまで過ごしてわかつたことは3つ。まずは大きく前世と食い違う部分はないということ。いまの俺は自分で行動決定権は無いに等しい。まあ当然だな幼稚園児だし。

あまり記憶には残つてないが前世も同じ幼稚園だつた筈である。

2つ目は俺の変化についてだ。ここに来る前の前世の俺とは明らかに顔が違つていた。いや、なんていうか俺なんだけど俺なんだけど俺じやないみたいな? 説明すんのも難しいが親の特徴受け継ぎつつも前とは違つてパ-ツのバランスがよくなつているんだ。これは俺にとつてかなりハッピーなことだつた。

3つ目は俺の能力。え？ お前能力なんてあつたの？ なんて思つてるかも知れないが：マジだ。あの後諦めきれなかつた俺は2年の歳月をかけて見つけだした。しかも複数。現在確認できている能力は4つ。

- ・絶対記憶能力
- ・一度見たものをコピーする能力
- ・天才的頭脳

#### ・空想具現化

ちよつと最後のだけ頭逝つてる能力ではあるが勿論制限がある。文字通りこの能力、空想を具現化できる。例えば『ああ、今日体育だりい、雨でも降らねえかなー』って考えながら使うと雨が降る。勿論みんな大好き厨二病の真似事だつて簡単だ。だが、時間だけは操れない。それが逆行してきた俺への弊害なのかは判らないが失敗したらやり直せないのは変わりがない。例え空想が現実になる力があつたとしても過去にはもう戻れない。

それでも初めはこの能力に喜んださ。ヤベエこれで勝つる。そう思つてた。いやまあいまでもわりと思つてるけど。

でもさやつぱり美味しい話にはウラがあるもんとこの能力。使うとちょ一疲れんだわ。あれだよアレ、わかりやすく言えば中学の時によくやるシャトルラン。あれ全力

で走つたような疲労感が襲いかかつくんの。：まあどこかの鍊金術士みたいに身体の一部もつてくとかじやなくて良かつたし、リスクとしてはぜんぜん軽いからいいけど。

でもまあ俺も決めたことがある。この能力は確かに凄い。それこそ世界征服だつて大金持ちだつて一瞬だ。でも思つたんだ。今俺が生きてんのは両親が頑張つてくれておかげだ。汗水たらして働いた金で食つていけてる。それを俺が苦労もせずにパツとやつちまつたら…なんか嫌だろ？勿論俺の力なんだから好きに使おうが文句は言えないかも知れない。

これでも前世は20歳だつたんだ。働く辛さはわかるし、働いてない時の喪失感もあるのどこまでも堕落しそうな感情も知つてる。まあだからこそつて奴でなるべくこの能力に頼らないように生きたいと決意したんだ。上3つはオートだから仕方ねえが最後だけはしっかりと判断して使う。それが幼いまでもしっかりと決めた俺自身のルールだ。

ここまで長つたらしい俺理論を述べてたがじやあ、お前は前世みたくただ毎日を消化していく日々を過ごすのか？ そう聞かれたら答えは勿論N〇だ。やりたいことなんてそれこそ腐るほどある。やり直したいことだつてある。見返したい奴だつている。

幸いにも俺には能力だつてあるし中身は20過ぎの成人だ。それこそこの時期からの身体の鍛え方なんてのもある程度知つてゐるし、知識だつて多い。その分他の分野に力を注げる。ようは俺は他の奴らよりアドバンテージがでかいんだ。

だつたらやるしかないだろ？

…

決めたぜ俺の信条は「出来ないことをやろう」

ちよつと意味不明かもしだれないがあれだよ、安心なんとかさんとの同じだ。

どうせならパーエクトヒューマン狙つてやる。

そんな決意を秘めた2×00年、4月11日の昼だつた。

カッコよく？ 決めた翌日。さつそく俺はタケノコ保育園へと向かう。勿論送迎はバス！ …と言いたいとこだが生憎と家から近いので親に自転車で送つてもらつている。

さて、俺はここで前世に思い馳せる。実は俺こと【朝霧 秋水】は…え？ ああ、読み方はしゅうすい、だ。それで続きだが俺はタケノコ保育園を中退してゐる。保育園を中退：なんかおかしい氣がするがいいだろ。俺は覚えてないが、当時はすごかつたようで帰つてきてはもう行きたくない！と訴えていたようだ。

じゃあなにが嫌だつたか？ 勿論母はそれを調べた。結果はこうだ。

『献立に乗つてないのに毎日マカロニサラダがでてくる』

は？ そんだけ？ え、うまくな。むしろ天国。そう思う人もいるかもしない。だがよく考えてくれ。毎日毎日同じものを食べる辛さは皆知つているだろう。それを見慢症のない幼子が食べるんだぜ？ 無理に決まつてんだろ。

今日は唐揚げだ！ でも隣にはマカロニサラダ。

お！ 今日はカレーライス。でも隣にはマカロニサラダ。

きたあ！ 今日はデザートがある！ でも隣にはマカロニサラダ。

そんな毎日を送つていた俺はいつしかマカロニサラダに恐怖を覚えるようになつていつたんだ。通称「白いアイツ」

なんせ残そもんならタッパーに入れてもち帰らされるんだぜ？ 帰つて親に見せる時には蓋にべつとりと着いた「白いアイツ」。俺は泣き出したよ、だつて無理だもん。アイツには勝てなかつたさ。

それで俺を心配した母ちゃんが幼稚園に移してくれたわけだ。

そんな因縁があるこのタケノコ保育園。俺の目の前にそびえ立つそいつは僅かに邪氣を放つていなくもない。そんな気がする。…たぶん、きっと、メイビー。

いつもと同じように過ごして昼になる。そう、昼だ。目の前には白いお椀に入ったク

リームシチュー。でも隣にはマカロニサラダ。

思わずゴクリと喉を鳴らす。

今にも逃げ出したくなるそれを抑えて食べる。あ、ヤバい吐きそう。もう無理、僕もう頑張ったよね。

過去のトラウマなんて簡単に消えやしないし、元から克服しようとも思わない。決意した翌日に何言つてんだと思うかも知れないが知りませーん。ぼくまだ3歳。

故に行動をおこす。隣に座るのは太郎くん。マカロニサラダが嫌いなのか先に食べようど一生懸命食べている。恐らく後で好物のクリームシチューでその後味を無くそうとしているのだろう。

なかなかの頭脳プレーだな太郎くん。だが甘い!!

俺は連日テレビでやつていたマジシャンの手品よろし高速で腕を動かし太郎くんの器にマカロニサラダを移す。

「え、え、え」

当然さつきまで残り僅かだったマカロニサラダが復活してしているのだ。実に恐ろしいことだらう。

キヨロキヨロと見渡しながらも涙を飲んで食べる太郎くん。だが最後には泣き出してしまい残ったマカロニサラダはタッパーと共に太郎くんのカバンへ。

太郎くん、君の犠牲は無駄にはしないよ。

心の中で熱く思い次の行動に移る。

毎日毎日、マカロニサラダ出しやがつて。俺はまだまだ残っている鍋の中に溢れてい  
るマカロニサラダを見る。

先生たちは優雅にサンディッヂですかあ？ふざけんじやねえ!! アイツの怖さ…味わうがいい!!

テレビでジエット機の試運転をしていた、あのスピードなら誰にも見られはしない。  
そして俺には手品師の器用さがある。これはいける!!

へつ、豪勢にベーコンレタスとは恐れ入るぜ。だが残念。

貴様の口に運ばれるのは肉汁溢れるベーコンではない。  
白くねつとりとした：アイツだよっ！！

何度も何度も口の中に入れる。サンドイッチが口に運ばれる瞬間中身はマカロニサ  
ラダ。

口直しにパックジュースを飲んでも口の中はマカロニサラダ。

しまいには口を開けるだけで中にはマカロニサラダ。

まつたくザマアないね。これで太郎くんも報われるつてもんだよ。  
スッキリした気持ちで家に帰る。そして一言。  
「お、おがあざんつ、あ、あの保育園にもう、いぎだぐない！」  
翌日、俺の幼稚園行きが決まった。

# ヤンな奴が狙つてる

4月16日朝

「ほら秋水。今日は幼稚園の初登校日でしよう。もつとシャキッとしなさい。」

「はあーーい」

いろいろと手続きをしたことで数日かかってしまったが無事に幼稚園にはいることが決まった。

ちなみに先ほど俺にシャキッとしなさいなんて失礼なことを言つたのが俺の母親。名前は【朝霧 友奈】ちなみに父親は【朝霧 剛】読み方はゴウだ。つよしではない。

しつかりした服とお馴染みの黄色い帽子、そして胸元にはチューリップの形をした名札。

まさに完璧なる幼稚園児である。

車で幼稚園へと向かう。

一一一ひいらぎ幼稚園

それがこここの名前だ。いい友達と出会うことができた場所。初めて好きになれた自

分の家以外の場所だった。

そんないい思い出のある幼稚園、さつそくお出迎えの先生が俺の前に屈む。

「秋水君だよね？これから楽しくやろうね？」

比較的若い先生のか笑顔がとても眩しい。いや、いいね本当最高だわ。この無邪気な笑顔。若いつていいわ。

中身24だからこの思考も仕方ない。さつそくみんながいるクラスに通される。俺のクラスはアサガオ。

保育園とは違い、小学校同様に椅子やら机やらがしっかりと配置されており、園児たちも座っている。中にはぐでえーっとしたり歩き回ってるやつもいるがそれはご愛嬌だろう。

先生に連れられてみんなの前に立たされる。

視線が痛いよ、やはりこのみんなの前に立つという奴は好きになれない。

俺の心境をよそに先生はみんなに笑顔で話し始める。

「今日からみんなと一緒に勉強する朝霧秋水君です。みんな仲良くしてあげるんだよお。」

続いて俺も挨拶をする。

「これからよろしくおねがいします」

幼稚園児らしい少したどたどしい感じで挨拶できた。

見回すと大多数の人は俺に興味がなさそうだった。まあ子供なんてそんなものだろう。

俺か心配してるのは1つ。マカロニサラダがでないか！　ではない。勿論出たら発狂するかもしれないがそうではない。

それはちゃんと子供に馴染めるかどうかだ。精神が肉体に引っ張られているとはいえる中身は成人男性が入ってるわけで、前と同じように仲良くできる確証なんてない。

少し不安になりながらも自分の割り当てられた席に着く。そして始まる朝の挨拶。

『先生おはようございます！みなさんおはようございます』

口を揃えての挨拶。実に懐かしさを感じるものだ。

H.R.も終わり自由行動に。

みんなも散り散りに動き始めたので俺も適当に散らばる。

そしてふと目に入つてくるのはブロツク。

誰しもがやつたことがあるのではないだろうか。ブロツク遊び。コマを作つて友達と対戦したり。俺の作った戦車が強いと自慢したり。友達の作った戦車が羨ましくて壊したり。泣いたり。ラジバンダリー。

まあいろいろな思い出が詰まつたブロツク。

そしてそのブロックを一心不乱に組み立ていく少年が1人。子供は初対面が大切である。緊張気味に声をかけた。

「ねえねえなにしてるの？」

「？ ブロックくみたてるんだよ」

「いつしょにやつていい？」

「うーん、いいよ」

ファーストコンタクトはまずまずの結果。ぶつちやけ子供同士なんて後は簡単だ。

お互いの作つたものでバトルしたり褒めあつたり貶しあつたり。

一週間も経つ頃にはとても仲良くなっていた。

こいつの名前は【鷺巣ただひと】顔は例えるとウルトマンにててくる怪人ダダメみたいな顔だ。でも我儘ばかりいう園児達の中で1番大人びている。  
他にも友達になつた奴らがいる。

【野下ゆうき】幼稚園児のくせしてすかしてくる野郎だが行動が面白いので仲良くしている。

ブロックを上に放り投げ胸元で片手キヤツチ！綺麗に決まつた時のドヤ顔は最高だ。  
【秋沢新平】なぜか俺に必要以上に懷いている。俺のことをシユウと呼んで慕つてくれる。『シユウ、シユウ、シユウ、シユウ、シユウうううう！』：正直怖い。

【秋山戒】 幼いながらも将来は美形になるであろうフェイスをしており、すでに周囲の幼女達の視線を集めている。将来有望株である。「あ、このコマカツコいい」など、カツコいいものに目がない。

つてな感じの4人で最近は遊んでいる。ちなみにこの3人は前世でも友達だった奴らだ。

今更だが逆行なのに前世なの？ とか言われても正直転生なのか逆行なのかわからん。たまたま同じ人間に転生したのかもしれないしな。

お昼の食事の時間、隣にはクラスナンバーワン美幼女の綾ちゃん。

——過去の俺

「綾ちゃん綾ちゃんパンツみえてるう！あはははは！もつとスカートめくつちゃえ～」「ヤツ！いやあ！やめて、…ぜ、ぜんぜえ～」

——現在

隣にいる綾ちゃんは美味しそうに海藻サラダを食べている。大して美味しくないだろこれ。

…ごめんな綾ちゃんパンツのこと。俺、あの時は若かつたんだよ。今にして思えば申し訳ないことしたなあとは思う。まあでも幼かつたんだ許してほしい。

そんなこんなで綾ちゃん眺めているとこっちを振り向いた。

「？ しゅすい君どうしたの？あ！これたべたいんだ、えい！どお？おいしい？」

突然口に押し込まれた海藻サラダ。ぶつちやけ味なんてわからない。いきなりのことに驚いているのだから。

まさかの口に海藻サラダ。これがマカロニサラダだつたとしたら彼女は既にここにはいないだろう。

「どーしたの？」

「な、なんで？」

うまく言葉にできないこの口が憎い。いくつになつても女の子と会話するのは苦手だ。

「うにゅ？パパとママがよくやつてるよーこれ。はい！あーん！てやるのー！」

無邪気な笑顔

無垢な瞳

天使のような容姿

……拝啓 父上母上。ロリコンになつてもいいですか？

いろいろありながらも一年が経ち俺たちも1つ上になつた。まあといつても幼稚園での学年なんてあつてないようなもの。要は後1年でみんなとお別れだよーつてこと

だ。

「しゅすい君！これあげる！」

弾けるレモンの香りではなく笑顔で俺にビーズでできたハートのアクセサリーをくれた。

：間違いねえこいつ俺に惚れてやがるぜ（ゲス顔）

とは言つてもお互い幼児だし、なにができるわけでもなく勿論する気もない。

Yes！ロリータ！No！タツチ！

これを守れない奴は紳士じやないのだよ。

ふつ。世の中所詮フェイスなんだよ。人生イージーモードかどうかなんて顔で8割決まると言つていい。その点、俺のニューフェイスはいい仕事してる。これで俺の学校生活は比較的安全になるだろうな。

別段取り上げることもなく緩やかに日々は過ぎていく。

特にやり直したいことはない幼稚園時代であるがそれは後に行く魔の小学生時代への休息の時だということを前の俺は知らなかつた。

だがいまは違う！！なにもできずにやらっていた俺じやない!!待つてろよ！小学校!!今日は卒園式。親も参列するこの行事はおそらく自分の子供の晴れ姿として初に来る人たちも多いことだろう。

式も無事に終わり最後の記念撮影。

俺の左腕に綾ちゃんが抱きついており子供らしく笑顔を向けてくる。対しておれの右腕には新平が。腕に抱きついている綾ちゃんを見つめて口元を歪める。

「ニヤリ」

ヤベエ、なんか前世より酷いんだけど。むしろもつかいやり直したいんだけど。やり直し直ししたいんだけど。

俺の幼稚園時代はこうして不気味な終わり方を告げた。

次は魔の小学生時代：

# 後ろのアイツは超ウゼエ

一一一 小学校。

皆はここになにを思うだろう。初恋だろうか？ それとも逆に失恋だろうか？ もしくはかけがえのない友達を見つけた場所だろうか？ ただただ退屈だつた場所だろうか？

：俺はどれも当てはまらない。

俺にとつてこの場所はトラウマ製造工場なのだから。  
魔の小学生時代が始まる。

入学式も終わり割り当てられたクラスに移動する。みんな緊張しているのか誰も喋らない。この初日の雰囲気はやはり独特のものがある。

ちなみに幼稚園からの友達はこの「竹の子小学校」に3人入った。新平、戒、綾ちゃんだ。残念ながらゆうきとダダ君は学区の違いにより離れたけどいづれまた会いたい。  
さて、現在の時点で前世と違う点は2つ。

1つ目はなぜか綾ちゃんに好かれているということだ。別になにかしたわけじやな

いと思う。普通におしゃべりしておままでつつきあつたりしただけだ。特別なことなんてしていいない。では顔か？と聞かれたら首を捻るだろう。なんせ俺は良くなつたとはいえそれ以上のやつなんてたくさんいる。身近でいえば戒がその例に当てはまる。

まあ、ここはあまり気にしても仕方ないだろう。

2つ目は新平だ。前世でも懐かれていたがそれは友達としてであり、こんなヤンな子だつた覚えはない。いつたいどうした、なにがあつたと叫びたいレベルである。この年の頃から俺のシャツの匂いを嗅いで興奮するんだぜ？ 上級者すぎるだろ。俺には扱いきれないよ。

以上の2つが前回とは違う相違点だ。他にも細かい違いはあるがやはり大きいのはこれだ。この違いが今後俺にとってどんな意味を持つてくるのかわからないが：今気にしてもしょうがないか。

氣を取り直して席に座る。初めはやはり、あいうえお順というやつで俺は廊下側の一番前。出席番号1番だ。

まあ、朝霧なんだし仕方ないよね。わかつてしたことだし。

そう、ここまででは何の問題もないのだ。問題があるのは俺ではなくその後ろ出席番号2番。

その名は【工藤 慧】 クラスに1人はいるであろうお調子者。勿論そういう役割がクラスを明るくするのは知っているし否定する気なんてない。ただそれは『遠巻きに見ている分』に限つての話だ。

話が見えてきたらどうか？ そうです巻き込まれるんです。

なんせ出席番号1，2。授業中にペアを組まされることなんて珍しくない。お調子者というのは大抵じつとしていられないで目の前にいる俺にしつこく話しかけてくるし挙げ句の果てに無視すると理不尽に怒り出す。

はつきり言おう。俺はこいつが…

超嫌いだつたんだよおおおおおおおお!!!

何なんだよお前!! 止めろよこつちはお前に構つて欲しくないんだよ。ニヤニヤしながら消しゴムのカス飛ばすな、鼻水垂らしながら近よるな、授業中不必要に話しかけてくるな、椅子の脚をガンガン蹴るな！

はあはあ。言いたいことなんてまだまだたくさんある。それぐらい俺はこの男のことが嫌いだ。しかも後に分かることだが家は近所にあり歩いて1分もかからない。

それがわかつた時の絶望感ときたらもう…。あの時は幼いながらに神を恨んだね。そんなこいつであるがなぜ俺にちよつかいを必要以上に出してきたか？ それを考えた時にわかるのは俺の体型だ。前世の俺は俗に言うデブであつたしふくよかな体つ

きをしておりお世辞にもカツコ良くはなかつただろう。オマケに体力は少なく鈍臭い。お調子者の慧にとつては格好的だということを幼いながらに理解していたのだろう。マラソン大会ではいつも最下位である俺に向かつてヤジを飛ばす。ドツジボールでは顔面にボールをぶつけられる。まあ、まだ学校内だけならそれも良かつたかもしれない。ただこいつの被害は家まで及んだ。家から1分。この近い距離。あいつが来ないわけがなかつた。

いきなりきて家に上がり込み俺の部屋に侵入。勝手にゲームをやり始める。ジュースの差し入れを持つてきた母さんにはなぜかしつかり挨拶をする慧。なにお前この歳でごまのすりかた覚えてんだよっ！ と言いたくなるほど憎たらしかつた。

こうして俺の小学校生活1年目は闇に飲まれていく。だがそれはあのままだつたらの話だ。

今の俺は違う!! 体型はスリムでありその中にしつかりと筋肉が詰まつている。それもううだらう自我が芽生えてすぐに負担のかからないトレーニングを毎日やつていたんだ。並の小学生に負けるような体じやない。

そしてプラス $\alpha$ で顔がいい。↑ここ重要。女の子というものは極めて単純な生き物だ。なんせ『カツコいいものの味方』なんだから。醜い奴がいじめられていても助けてなんかくれない。だがイケメンがいじめられてると不思議と女子が加勢してくれるの

だ。不思議なこともあるだろう？　でもこれはれつきとした事実だ。だからこそいつもは俺に容易に手は出せない。初めはそれがわからないだろうが徐々に理解するだろう。

自己紹介が始まる。勿論最初は俺からだ。1番初めということもあるのか誰もよそ見することなく俺を見てくる。

「朝霧　秋水だ。よろしく」

小学1年生とは思えない堂々とした挨拶。内容は完結であるが威圧感は伝わった筈だ。そのせいいか担任の先生は口をパクパク開けているし。心なしか後ろの慧も驚いているように見える。

回復した先生が次の人へ挨拶を促す。勿論相手は慧だ。

「おれ！おれ工藤慧!!みんなよろしくしてやつてもいいぞ！」

だががお前となんか仲良くするか帰れこの坊主頭。お前は一度寺に修行僧として修練を積んでこい。そしてそのまま帰らないまである。

あ、言い忘れてたが戒と新平は違うクラスだ。これはあらかじめ知っていたので大した驚きはなかった。ただ去り際の新平の顔にはゾツとしたけど…：

徐々に順番は回つていき綾ちゃんの番になる。

「こ、小日向綾でちゅ。よ、よろしくおねがいしましゅ！…あう」

いまのでこのクラスの男子の半分が綾ちゃんの魅力にやられたな。幼いながらなんて魔性の女よ。まったく恐ろしい子ッ！

「好きなひとはいますかっ！」

さつそく慧が質問する。こいつもやられた内の1人というわけか…

「え、え、え」

戸惑いながらもチラリと目線を向けてくる綾ちゃん。

だがそこは小学1年生。気付ける人なんていない、慧なんておれのこと好き？ なんて恥ずかしいこと聞いてるし。会った瞬間にテメエみてえなの好きになるやついるボケ。

「はいはい。質問は後にしましよう。次の人が願いね」

ざわめいていたクラスを先生が鎮める。でもそこは慧クオリティその程度じゃ止まらない。

「なああや。おれのことすき～？」

「こら、慧君。早く席に戻つて。綾ちゃんも困つてるでしきう？」

それでも言うことを聞かず擦寄る慧。何度も何度もしつこく尋ねていき、なんとか好きと言つてもらおうとするのが見ていてわかる。だが流石の綾ちゃんも我慢の限界がきたのか一言。

「きらい」

その言葉はやけに教室に響いた。たつた3文字の言葉。たつた3文字ではあるが慧の心をえぐるには十分すぎた。

「ひ、ひぐう。ええ：びきやああああああ！」

号泣する慧。ザマア!!!! 泣き喚けこの負け組野郎が!! なにがびきやあああああだカス！テメエは妖怪かなんかかよ（爆笑）

…内心めちゃくちや嘲笑つてる俺はもしかして性格悪いんだろうか？

ハプニングもあつたが全員の自己紹介も終わり次は学校でのルールやら教科書の配布がされる。…1つ1つ名前書くのつて怠いよね。

それも終わつてようやく帰れる時間となつた。だいたいの学校は入学式といつたら早く帰れるイメージがあるのでないだろうか。ここも例に漏れず午前中だけで終わりだ。

おそらく保護者説明会が終わつて校門前で俺を待つてゐるであろう両親のところに行こうと立ち上がる。

すると目の前に綾ちゃんがいた。

「あ、あのね。いつ：いつしょにいこ？」

…ぴきやああああああ！！ ハツ！俺も妖怪になりかかっていた。恐ろしい女だ：綾

ちゃん。

そんなバカなことを考える程度には可愛かつた。

黙つていた俺を見て不安になつたのか目尻に涙がたまつてゐる。慌てて了承の旨を伝えると花が咲いたように笑つてくれた。

だが、ここですんなりいかないのがこの魔の小学生時代である。

「あや～。こつちとかえろうよ！」

はいできました慧！ 工藤慧！ テメエは転生チートオリ主でも天然系イケメンキャラでもなんでもないんだから黙つてお家に帰りなさい。そんなことが言えたらどれだけ楽だろう。まあ、言つても意味わからんと思うが。

「いやー・しゅすい君とかえる！」

いや～。嬉しいこと言つてくれるね。でもね綾ちゃん、俺の名前しゅうすいだから。しゆすいじやないから。

「おい！お前！」

はいできましたあ～。定番台詞『おいお前』。矛先を変えるためによく使われますねえ。大方綾ちゃんには強くでないため俺にいちやもんつけようとしたんだろうがはつきり言つてめんどくさい。

なのでこうする。

「綾ちゃんいこう」

パツと手を取り走り出す俺。

やだ俺イケメン…。

「えへへへ」

ニヤけている綾ちゃんはやはり可愛かつた。

後ろから何か騒いでいる音が聞こえたが今の俺たちには大して気にならなかつた。

玄関で靴を履き替える。その為には一度手を離さなくてはいけない。その時の綾ちゃんの顔が悲しみに染まつていたので履き換えた後にまた手を繋いであげたら二へラヽつと笑つていた。

玄関をでると人々。参列していた親たちがこぞつて自分の子供を待つてゐるのか身長が低い俺たちではなかなか自分の親を見つけられない。

そんな時後ろから声が。

「綾へ。こつちよよ。」

特徴的な間延びした声が俺たちに向けられている。すぐに綾ちゃんは反応を見せた。「あ！ママ！」

だが駆け寄りたくても手は離したくないのか俺とママを交互に見てくる綾ちゃん。仕方ない。そう思つて綾ちゃんに笑顔を向けながらママを指差す。綾ちゃんも意図

をわかつてくれたのか途端に困り顔から笑顔になつた。

「ママ！パパ！あのねしゅすい君だよ！」

要領を得ない言葉であるが、そこは親。しつかりと意図を組みとり俺に挨拶してきた。

「あらあら。初めまして綾の母親の翠です。気軽にお姉さんって呼んでね？」

最後はウインクしながら決めてくるとはなかなかユニークな人らしい。外見はとても若く一児の母とは思えない。

隣にいた男性に目を向けるとこちらもまた挨拶してくれた。

「綾の父親の永だ。綾の友達なのかな？これからもよろしく頼んだよ」

微笑ましそうに繋がれた手を見ながら頭を撫でてくれた。

いつまでも舐られたままでは男がすたる。別に子供なんだからと言われればそれでだがパーエクトヒューマンを目指す俺はしつかりと挨拶もこなしたい。

「初めまして綾ちゃんと仲良くさせていただいております。朝霧秋水です。よろしくお願ひします」

…ポカーンとしているご両親。それも仕方ないか娘と同い年の少年が見た目に似つかわしくない言葉を使いながら挨拶したのだ。大抵ビビる。

それでも翠さんは笑顔で見てきてくれた。

「あらあら、ずいぶんしつかりとしているのねえ。これなら綾も安心ね」

「うん!!」

そう言つて2人で笑いあつてゐる。永さんもそんな2人を見てかだんだんと笑顔になつていつた。

せつかくなのでと綾ちゃんとツーショットを撮つたり、ご家族の皆さんと一緒に撮つたりなど。いい記念になるようなイベントもこなし、満足しながら綾ちゃん一家は帰つていつた。

その後ぐるぐると親を探していたら丁度誰かの親？と話しているのが見えた。

「あら、おかえり秋水。どうだつた新しい学校は。友達できた？」

「まあね。楽しかつたよ」

「ふふふ。よかつたわね」

親子でコミュニケーションをとつていると先ほど母さんと話していた人がこちらに視線を向けてくる。

「この子が朝霧さんの息子さんかしら？　ずいぶん逞しい顔つきねえ。将来有望そだわ！」

「ええく。そうですか？　いつも家ではちやらんぱらんなんですけど…」  
失礼な。休む時に休んでいるだけだ。何が悪い（えへん）

2人で会話を始めてしまったので母さんの裾を引く。

クイクイ

「ん？ なあに。ああ、さつきそこで知り合つたのよ。あんたと同じクラスに息子さんがいるんですって。そうだ！」 工藤慧君って名前なんだけど知ってる？」

：そうだ思い出した。この隣の人。あいつの母親だわ。高校卒業してから一度も会つてなかつたからすっかり忘れてた。

この母親、文子さんはなかなかに強者である。親はヤクザの組長であつた工藤組のお嬢として生まれ、なかなかに苦労した若者時代を過ごす。その後運命の人と呼べる人を見つけたが既に既婚者で妻子持ち。だが、そこで諦める彼女ではなかつた。アタックによるアタックで最後には略奪婚まで漕ぎ着ける。若い頃から苦労した彼女は地元でも1番の高級スナックのママをしておりかなりの貯金があつた。そのお金で相手側、つまり別れさせた女の子供達の面倒まで見始める。凄まじく剛毅な人である。その後もういろいろあつたようだがなんとか仲良くやつているというまさに剛の者である。

やはりこの親にしてあの息子だと思うと納得してしまう。生来の押しの強さというものがそつくりなのだ。

その後慧が合流して一悶着あつたのだが面倒なので割愛しよう。

小学校入学という輝かしい記念日ということで家族で写真を撮つた。

これからの学校生活。まだまだ不安はあるが楽しくやつていけそうだとその写真を見ながら思つた。

# いい子いい子

校舎の見取り図が完璧に頭に入っている俺は迷わず進む。目指すは1—4。俺が所属しているクラスだ。

学校が始まつて一週間が既に経つている。

クラス内で友達グループを作り始めた奴らもいれば既に周りから遠巻きに見られる奴もいる。やはりこの頃からだんだんとカースト制度というものが始める。『俺はそんなの気にしねえ、だつて学校生活楽しめねえじやん!』とかいう主人公気質の奴がいたなら意識も変わらぬかもしれないが大抵の奴はそうじやない。自分の立ち位置がよくわからないながらに上へ上へといこうとする。その結果として残るのが友達グループとかいうやつの正体だ。

まあ、だからって否定するつもりはない。その中で芽生えた友情だつてあるだろうしそこから本当の友達とかいうやつにもなれるかもしれない。だが全部が全部そうではないのだ。

俺の場合は綾ちゃん繫がりで女の子とばかり仲良くなつてしまつた。そのせいか男

の子との会話が減つてきている気がする。まだ男女の意識が芽生えるのは早い気がするのだが……きっと綾ちゃんスマイルによつて少し早めの思春期が来てしまつたのだろう。

クラスに着いて席に座る。すると先に来ていた綾ちゃんが挨拶をしてくれた。

「あ！ おはようしゅすい君！」

「うん、おはよー！」

ここ毎日のように挨拶していたせいか既にこのやりとりが定番化している。

今日は月曜日……別名白いご飯の日である。月から金にかけて給食が出るのが普通であるが月曜日だけは家からご飯を持ってこなければならない。これを忘れるとお腹にたまるものが少ないので午後の授業は悲惨な目にあうのだ。

その白いご飯の日も今日が初であるため、おそらく忘れてくる人が何人か出てくるだろう。大体の人たちはランドセルから布袋を取りだし机の横にかけている。おそらくそれが白いご飯だ。逆にそうしていらない奴らは忘れてしまつた奴らで内心ビクビクしているだろう。……わかるぞ、お前たちの気持ちが俺も昔はビクビクしてたからな。

元気よく扉が開かれる。

「おっはよー！！」

奴が來た。

さつそく席に座りランドセルから教科書、筆箱、連絡帳を、箸箱……終了。布袋なし。本人はいつもと変わらず能天気に『俺のこのシャツすげーだろう！ぶらんどものなんだぜー！』とかほざいてやがる。

結局慧は忘れ物に気がつかずに昼まで過ごしていた。

給食。当番の人たちが鍋やら食器やらを運んでくる。この白衣もよく週明けに忘れてくる奴がいる。そうなれば大抵もう一周続けて同じ班の奴らが当番になるので、めちゃくちや責められるのだ。集団の力って怖い。

「あ！あ！ わすれてた！」

バカめ!! 今になつて気づいてももう遅いわ!!

頭のいいやつは大抵朝のH.R.が終わつた瞬間に玄関前の公衆電話に移動。テレホンカードを挿入して親へと連絡。白いご飯を持ってきてくれと頼み込み事無きを得るのが定番だ。

だが直前ではそうもいかない。こうなると残された道は2つ。先生に忘れた事がバレないようにビクビクしながら食べる、プラス $\alpha$ で空腹。2つめは恥を忍んでみんなに分けてもらう方法だ。

だがこの2つめ。クラスの人気者ならいいがそうでなければ自分からなんてとてもできる事じやない。プライドが高ければ高いほどに自分からは言い出せないだろう。

怒られるのが恥ずかしいという感情が先に出てきてしまうからだ。

だがそうして尻込みしてるともつとも嫌なパターンがきてしまう。

先生が手伝つてあげようパターン。

先生はその子を助けようとみんなに分けてあげるように促す。だがこれが断頭台への第一歩。みんなは仕方なしにしぶしぶと分ける。そう、しぶしぶと。男子はまだいい。文句を言いながらもくれる奴が大半だから。だが女子は言葉ではなく表情で話すのだ。「え？ こいつにあげるとかマジいやなんだけど。うえ、箸で触っちゃつた。今日もうこのご飯食べらんない」

こうやつて顔で語るのだ。恐ろしいつたらありやしない。これを受けた奴はだいたい次の日学校を休む事になる。そしてそこから始まる学校行きたくない病。何気ない一言や表情が他人を傷つけるいい例だ。

席についていただきますの挨拶をする。その際座つてる俺たちとは違い、先生は立てみんなを見回している。

ああ、慧ドンマイ。これがある日は逃げらんないぜ。

稀にだがチエツクしない日がある。これに当たれば恥をかかなくて済むが今日は初日。やはりチエツクはあるようだ。

「あら？」 工藤君と立石君白いご飯忘れちゃつたの？」

みつかつた。

そんな表情を浮かべる2人。

先生は今日は初日だから仕方がない。次からは気をつけるようにと注意したのち俺たちに声をかける。

食器の1つを器にしてご飯を各自よそうがやはりどこかみんな嫌々やつている。でもこんな時大抵“いい子ちゃん”つてのがいるもんだ。

「ぼくきょうは、あんまりお腹減つてないからたくさんとつてもだいじょうぶだよ！」

「葉山君はいい子ね」。えらいえらい。」

【葉山隼人】既に友達グループを形成しつつある、イケメン予備軍だ。そしてこの男、俺の記憶では前世にこのクラスにいなかつた人物でもある。そういうふた経緯から前々から注目はしていたが、やはりここでも『いい子』を演じていた。

『いい子』別段これに悪い印象は受けない。だがよく考えてくれ、いい子なんて印象いつたいこの短期間でどうやって身につけたのか。簡単なことさ。ようは困つてるやつを助ければいい。『人が見ている前で』という前提がつくがね。おそらく彼は頭のいい少年なのだろう。普通の小学生1年生ができることじゃない。そして頭がいいからこそ計算高い。結果として導かれるのが『自分が生きやすい環境をつくること』だつたのだろう。まだ、ここまで具体的はあるとは思えないがおそらく、近い何かがあるに

違いない。

クラスの人気者。こういつたやつが動くと周囲も動く。それは幼くても同様なようで、今まで嫌々だつた人たちがこそつて分けるようになつていた。

こうすると立場が危うくなるのは分けていない人たちだ。

『俺たち分けたんだからお前も分けろよ。』 そういう感情が目に映つているのだ。目は口ほどに物を言うとはよく言つたものである。いま、まさしくその状態だ。

分けていな人たちは数人のみ。勿論俺にも視線が集まつてくるが俺は堂々としていた。

「しゆすい君はわけてあげないの？」

彼女は優しいのだろう。困つていたら打算抜きで助けることができる人格者かもしれない。

少し悲しそうな顔でみてくる綾ちゃんに罪悪感を感じながらも言葉を紡ぐ。

「先生、2人ともそんなに食べれないと思いますよ？ みてください容器から溢れ出しそうじゃないですか」

そう言つてこの場でもつとも立場のある先生に意見を言う事によつて俺から先生へと視線が変わる。ここで納得すれば俺への非難はなくなり、逆にそうでなければ俺に一気に集中する。

「確かにもう良さそうね。2人ともよかつたわね。みんなに感謝よ」

どうやら大丈夫みたいだつた。別にご飯くらいならわけてもいいのだがいかんせん食べきれないのに分けてやるほどお人好しでもなければわざわざ自分の分を減らしてまで人にあげようと思わなかつたのだ。特にこいつには。

葉山に結果として救われた隣にすわる慧をみながら、命拾いしたな！　⋮と思う俺はやはり性格が悪いのだろうか？

ご飯を食べた後は昼休みが待つていて。大抵の小学生はこの昼休みと体育の授業、または図工の授業の為に学校へ来ていると言つてもいいだろう。

今日は葉山の提案でクラスみんなで鬼ごっこしようという事になつた。ことわる理由も特になかつたのでおれも参加している。インターブロックと名付けられた駐車場前の広場で皆が自由に走り回つていた。現在鬼は工藤慧。なぜかクラウチングスターの構えから走り出す。

だが遅い！ふはははは！体の作りからして違うのだよ君とは！！迫つてくる工藤の目の前にわざと立ちフェイントをして惑わせる。走り回つて疲れていたのか足下がおぼついてない。左かな？　左じゃないよ、左だよ。

結局おれに翻弄される形となり無理について行こうとした結果、足がもつれて転ぶことになつた。

ザマアないねファーナー!!おれのテンションが内心跳ね上がる。器量が狭いと思うか？ その通りです!!!!

否定なんてしない、俺はいまこの瞬間を最高に楽しんでいるのだからッ!!  
泣き始める工藤慧。見下ろす俺。はたから見れば完全に俺が悪役だろうが生憎と周りの奴らはいまのを見ていたため誰も俺を責めないし、普段から高圧的な慧をわざわざ助けようなんて奴もいない。結局さつきの白いご飯同盟、立石君が付き添いで保健室に連れていった。

あいつがいなくなつても鬼ごっこは終わらない。鬼、誰やる？ といった時に葉山がすかさず最後に鬼の近くにいた人と言つたので俺が鬼役となつた。

葉山ア、テメエ実はお前の提案でご飯わけなかつた俺を目の敵にしてんじやねえだらうなあ。

やつてやんよ…。狙いを定めるため辺りを見回す。こういう時にもやはり男子はどこかカツコつけたいためか、わざわざ自分が不利になるのに無理に余裕を見せようど座つたり寝転んだりする。

バカめツ！ 俺の餌食にしてやろう！…と言いたいところだがやめておいた。俺はいま狙いたいやつがいる。このゲームが始まつてからまだ一度も鬼になつていない男。葉山隼人、そして俺を鬼役にした男である。

狙いを定めて足に力を入れる。駆け出した俺は一直線に葉山の元へ。予想以上の速さに驚いたのか慌てて葉山が逃げるがもう遅い、フェイントをかけてくるが俺には何の意味も成さない。圧倒的速さの前には小細工など無意味!!!  
必死に逃げる葉山、足には相当の自信があつたのかいつもの優しげな笑みはなく鬼気迫る形相で逃げている。

だが現実は厳しいもの。俺の手が葉山の背中にあたり決着がついた。  
葉山の顔を見るとまさか自分が：みたいな顔をしていた。

「おいおい小1の分際でどんだけ自信家だつたんだよ。  
「おい！お前が鬼だぞ。はやく捕まえたらどうだ？」

「え？ う、うんそうだね。そうするよ」

じつとこつちを見つめてくる葉山。それはまるで今やつと俺という存在を認識した  
かのようで不気味だった。

昼休み終了の鐘がなる。なんだかどつと疲れた休み時間だった。

# 心ここに在らず

学年が3年に上がった。敬語という明確な上下関係を表す指標がまだない小学校は、からだの大きさが上だからという理由である程度年上を認めている。

人は自分より優れていると思える人には謙虚になれるが劣っていると思う人には高圧的な態度、またはぞんざいな態度をとってしまう生き物だ。無論のこと俺もその例に漏れない。

葉山隼人は優秀だ。だからこそ周りを選ぶ。周囲にいていいと思える人達だけを置く。そしてそれはグループとなり選ばれた者たちは調子にのり他者を見下すことを覚えはじめる。

選民意識と支配欲。自分の容姿、発言力というものをしつかりと理解してのマインドコントロール。

…まるで支配者だな。選ばれた優越感、選ばれなくなつた時の恐怖感。前者は葉山と話すことで、後者は他者を貶めることで和らげている。

自分にとつて最適な環境が他者にとつて最適とは限らない。彼はそれがわかつてい

ないのかかもしれない。

クラスも変わった。あの工藤慧は別なクラスへと引き、綾ちゃんと葉山は同クラスとなりた。3—1組だ。

「おはよ！秋水君！」

…気づいたか？

そう！！名前を間違つてない！！やつと正しく呼んでくれるようになつたのさツツ！！

それはともかくとしてこの3年生。1つの問題が起ころ。

——担任交代。

あまりにも問題児の多いこのクラスの担任をするのが嫌になり放棄。最後は泣き出してしまうという出来事だ。

ぶつちやけおいおい。お前教師だろ？ とか言つてやりたかつたが当時の俺は純粹で、なんで泣いてんだろーなーぐらいにしか思わなかつた。

この女先生、他の先生たちからベテランだの熟練者だのと言われていたがはつきり言つてカスだつた。

いやカスとか言いたくはないよ？ でもねえカスだつたんだよね。

3年にもなると幼かつた子供達もいろいろな言葉を覚え、生意氣にもなつてくる。その言葉が教育者である先生に向かうのは当然の結果だと言えるし、なによりも小学校の

先生なんだ、あらかじめ理解していなければダメだつた。

確かにこのクラスは問題児が集中している。あの工藤慧の劣化版みたいな奴が6人ほどいるし、それに加えて今度は超マイペース君だつている。ナキワメークだつている。

マイペース君はいつも自分のペースで物事を進めようとする。給食時間を過ぎたとしてもゆっくりと食べる。そんな光景はどの小学校でもあつたのではないだろうか。だが共同生活の場というものは誰か1人を優先することなどできはしない。給食当番がはやく食器を片付けたいがためにマイペース君を口々に急かし始め、やがてそれは罵倒へと変わり陰口が始まる。

ナキワメークは簡単だ。気に入らないことがあるとすぐに泣くのだ。まだまだ世の中を知らない子供。自分の思い通りに少しでも近づけようと彼は泣く。

だけど特例を認めてしまうわけにはいかない。1人の特例を認めては集団というものは統率などできない。クラスというものを任せせる立場にある先生は大変なクラスを持つたと俺も思つた。

だがそれは逃げてもいい理由にはならない。途中交代なんてするべきではなかつた。自信がないのなら初めからやらなければよかつたのだ。『私はこれだけ頑張つた、あのクラス相手にこれだけ持つた。』そんなもの、社会で通用するわけがないし、慰めの言

葉を投げかけられても惨めになるだけだ。

社会の厳しさと大切さを教えるべき立場であるはずの教師がそれを放棄して責任から逃げ出した。故に俺は評したのだ『カスである』と。

教室に担任が入ってくる。

「今日からみんなの担任をすることになりました【河原 未菜子】です。みなさんと一緒に頑張つていけたらいいなと思います。よろしくね。」

温和な笑みを浮かべる河原先生。40代半ばの年齢だったと記憶しているその顔はシワが多く目尻が下がっているため気弱で頼りなさそうに見えた。

この人が前世と同じような過ちを繰り返す可能性は極めて高い。今までの時間が多少の違いはあるが、前世をなぞるかのように繰り返していたからである。この失敗も繰り返される可能性は十分にある。

なら、能力を持つ俺が手助けをしたら？ それは簡単に解決するだろう、一切の苦労もせず何も得られない代わりに彼女は平坦と教師をしていくのだろう。

それは嫌だ。任せた仕事を途中放棄するような人に力を貸したいと思うか？ 答えはNOだ。彼女は選ばなければならない。今までの自分か、これから自分かを。

彼女が担任を変わるまで半年、それまでに何が起こるのだろう。

あの挨拶から一ヶ月も経ち、友達グループもそれぞれ分かれたように感じる。相変わ

らず先生は子供達に振り回されて居るがまだその顔からは悲壮感やら疲労感は見えない。

相も変わらず葉山は周囲のメンバーと仲良く話しているし、俺は俺で綾ちゃんによく話したり遊んだりしていた。

### 一見、順風満帆な学校生活。

だが世の中勝ち組がいれば負け組がいるのは必須。この頃になり明確な意思のもとに行われ始めるのがイジメである。自立意識の成長と共に他人を強く意識しはじめる時期だからこそ、気に入らない奴は気に入らないと排除しようとする。

俺は今、その現場に立ち会っていた。

時間は昼休み。図書室から借りた本を返しに一階までいった帰り、たまにはこつちから帰ろうといつもとは違うルートで教室へと帰ろうとした。

本当にただの気まぐれだつた。

普段人があまり通らない理科準備室前の階段横に彼女達はいた。

俺は階段を登るのをやめて、別のルートから戻ろうと踵を返す。

その時に：彼女の声を聞いたのだ。

「その認識を改めなさい。貴方達のしていることは無意味な行動だと理解できないの？ 他者を貶めることしかできない人間が他者から好意を寄せてもらおうだなんて甘い

考えね。正直：吐き気がするわ。」

「……」

……え？ 今のつてアレだよね？ 小学生の言葉だよね？ どう見ても長年辛い人生を辿ってきた女性キャリアウーマンがいいそうな言葉なんですけど。ていうかあの子堂々としすぎじゃない？ なんで4人に囲まれてそんな平然としてるの、その年でいつたいどんな修羅場くぐり抜けてきたんですかああ！

俺が困惑している間にも会話は進む。

「な、なによ!! むつかしい言葉ばっかりいつて！ そういうえらそうな態度がムカつくのよ！」

『そ、うよそ、うよ!!』

リーダー格の少女が怒鳴る。それに合わせて取り巻きも喚く。

それでも彼女は依然として冷静さを失わない。一見した立場は集団のほうが有利だろう。だが、実際の立場は大人びた彼女のほうが上だ。

このイジメ、きっと彼女なら自分でなんとかできるだろう。

そう判断して今度こそ帰ろうと意識をそらした。

——瞬間

「ねえ、もうさ。やつちやわない？」

「ええ、ちよつとかわいそうだよ」（ニヤニヤ）

スカートのポケットから取り出したのはハサミ。

「ねえ、そのきれいなみ。私達がきつてあげよつか」

リーダー格がそう言つた瞬間に取り巻き立ちが拘束にはしる。押さえつけられた彼女に抵抗の術はない。いくら精神的に有利になつていても数の暴力には無意味だ。

「…………」

刃物を持つた人が動けない自分に近づいてくる。それはどうしようもなく怖いだろう。それが悪意を持つた相手なら尚更だ。

まつたく：最近の小学生は過激だな…。

だが、このまま通り過ぎるのは忍びない。関わらないことは簡単であり見逃すことなんて造作もない。だが彼女の言葉がよぎるのだ。この年であそこまでの倫理観それに加えてあの度胸。なにより…かつこいいではないか。

ならば俺も男だと、ここで逃げたら男じやないと。そう心が訴えてくる。

ああ、わかってるさ。確かにこれは自己満足だ。

実際彼女はいまだ誰にも助けを求めず、自分の力で抗おうともがいでいる。俺が行つ

たとしても事態は先送りにしかならず、結局は繰り返されるだけのその場しのぎ。

だけど、ここでやらなきやカツコ悪いだろう。そんな自尊心が湧いてくるのだ。

普通なら飛び出して『やめろよ!!』とかいうのだろうが生憎と俺にそんなものを求められても困るし、なによりこの場合それは悪手だ。またいらぬ火種をつくることになりかねない。

だから俺は俺にしかできない方法で手助けしようではないか。

忘れていたかも知れないが俺には類稀なる能力がある：それをもつてすればこの場をやりきることなんて：簡単なことさ。

刃先を向けられる彼女。心なしか震えている手。だが、その瞳だけは屈していない。

その瞳をみて俺は一芸を演じた。

「松下先生、理科準備室に用事があるとか、どういつたものをお探しですかな？」

「お手数おかげします宮外先生。実は今日の授業で使う顕微鏡の数が足りなくてですね。ここにないかと思つたのですよ」

先生達の声が階下から響く。

当然彼女達は焦る。なにせいま自分達がしている行動はどこをどうとつても褒められたものではないし、それを理解もしているからだ。

だからこそ他人を気にする暇もなく逃げる。先程まであんなに執着していたあの子も放置して我先にと逃げ出す。

残されたのは彼女一人。気丈に振る舞つっていてもやはり本能的な恐怖からは逃げら

れなかつたの氣力が抜けてへたり込む。

それを確認したのち俺は今度こそ教室へと戻つた。

それを上から眺める彼女に気づかないまま。

教室に戻つてきて席に着き、さつきの出来事を思い返す。イジメなんてものをいくら注意したつてなくなるわけじやない。人が生きて同じ環境にいる以上、どうしたつて優劣がついてしまう。そこから歪みが出てくるのは当然の摂理と言えるだろうし、なおのこと彼女達は小学生であり、自分の心を抑えることはとても難しいだろう。

### ——声帯模写

文字通り声を模倣する技術だ。それを使つてさつきはやり過ごしたが所詮はその場しおぎでしかないしこれ以上深く突つ込もうとは思えない。

わざわざ面倒事を自分にかかえ込むほど俺はお人好しじやない。

そう再度自分に言い聞かせてこれ以上考えることをやめた。

休み時間も残り僅かになつた頃、慌ただしく廊下を走る音とともに勢いよく扉が開かれる。

「あ！ ハヤトくん！」

―――あれはさつきの…。

葉山に擦り寄る少女は先程までイジメをしていたリーダー格の奴だった。

「ハヤト君つて、雪ノ下雪乃とどういうかんけいなのー？」

「あゝ。なんて言えばいいかな…。家同士の付き合いがある大切な幼馴染…かな？」  
―――大切な

その言葉が葉山から発せられた時、僅かに眉がピクリと動いた。

「へゝそうなんだー。」

来た時と同じようにニコニコしながら話す少女。

だが心なしかその意識はここにない誰かに向けられているかのような感覚を覚えた。

考えることをやめた筈のあの大人びた少女の顔が、頭をよぎった。

# 想いは止まらずされど届かず

恋とな何か。愛とは何か。そう聞かれた時なんと答えるだろうか。  
重さの違いなんてあるが果たしてどうだろう。「好き」という感情にそもそも優劣などあるのだろうか。

よく、ラジオや掲示板なんかを見ているとこんな質問がある。

『恋と愛の違いを教えてください』

前世も通して恋愛なんて仕方がない俺からしたら同じにしか聞こえないが世間の見方は違うらしい。

英語に直せばどちらも『LOVE』だ。しかし一般的には愛の方が強い表現として使われることが多い。

恋の後に愛がある。ならば恋の前はなんなのか？ 俺にはやはりわからない。だが、その1つの例として当てはまるのが『大切』という感情なのではないだろうか。

「大切な幼馴染……かな？」

葉山はこの言葉になんらかの感情を込めていた。それは見ていてわかるものであつ

たし、目の前で見ていた少女にだつて伝わつただろう。だからこそ少女はこう思った筈だ。『今この彼の心の中にいるのは私じゃない』

葉山の言葉に隠された思いが『好き』という感情である確証はどこにもない。それは言葉通りの家族に向ける親しみのようなものかもしれない。でも、少女はそんな考えになんて至らないだろう。いや、もしかしたら関係ないのかかもしれない。

恋は人を狂わせる。大の大人だつて苦労し、苦悩し迷うのだ。小学3年生の少女がその苦しみに耐えられる筈はない。

だからこそ少女は楽な方へと走るだろう。その後に来る結末なんて考えない身勝手な行動へと移るだろう。

そしてその矛の向かう先は……雪ノ下雪乃。あの大人びた彼女はまた理不尽な怒りを一身に背負うのだろうか？

彼女は背負うだろう。誰にも助けを求めず弱音を吐かずに背負い続けるのだろう。

世界はいつだつて優れた者にこそ優しくはない。

昼休みが終わり5限目が始まる。この時間帯になると眠たくなるのが学生というものであり、小学生なら尚更だろう。現に今も大半が船をこいでいる。

「ほら、みんな起きて。ご飯食べて眠いのはわかるけどこれで最後の授業なんだから

頑張ろう?」

先生が呼びかけるが大して意味をなさない。それもそのはずだ注意したという事実を作り後は放置。この先生は甘いのだ。生徒に、そして何よりも自分に。

一度呼びかけて起きないなら何か方法を考えるべきだ。この年頃から必要になつてくるのは我慢を覚えることだ。思春期というものは多感な時期であり感情の起伏が激しい。よつて必要になるのが自分のコントロールだ。自分自身をコントロールできない人間は社会から爪弾きになるのが道理であり、そうならないために人は我慢を覚えるのである。

それを知っているはずの先生がアクションを起こさないのは楽だから。眞面目な生徒は初めからちやんと起きている、寝ている生徒はみな問題児と呼ばれるもの達。

依然として状況の改善は見られず、先はもう短い。

「おーいしゅうすい! まつてよー!!」

H Rが終わりすぐに帰宅しようと玄関に向かつていると後ろから声がかかつた。声から察するにあまり会いたくない相手ではあるが応じるしかあるまいて。

「やつと追いついた! もう、歩くのはやいよおー」

ブンブンとか、つきそうな表情してるけど全然可愛くない。

「やめろひつつくな新平」

「えー。ちょっとくらいいいじゃん」

そのちよつとがオカマバー並みの危険纏つてるんですけど。

「つたく。お前そのキャラでクラスにちゃんと馴染めてんのか?」

「え? うん。友達もできたよー」

なにそれ当たり前じやん。みたいな顔されても知らんし。普段のお前のキャラ見て  
るとドン引きだからね?

「あ、でもやっぱりなかには一人ぼっちの子もいるよー」

まあ、そりやそうだろ。性格だつてみんな違うんだ合う合わないは誰にだつてある。

「へえ。まあまだ学校生活は長いんだそのうちできるだろ」

知らんけど。

「うーん。でもねなんか空氣? みたいなのが悪い気がするんだ。 雪ノ下雪乃つて  
子なんだけどね、女の子たちから仲間はずれにされてるんだ」

……ん?

「今お前雪ノ下雪乃つて言つたか?」

「え? うん」

「髪が長くてちよつと冷たい感じの?」

「髪が長くてちょっと冷たい感じの」  
「おお、グットタイミング。

「そういえば女の子はって言つてたけど男子からはどうなんだ?」

「……」

じ一つとこつちを見つめてくる新平。

いや俺男に見つめられてもときめかないと勘弁してください。

「好きなの?」

……

「……は?」

「その子の話だけはなんか聞こうとするから」

なぜそうなる。

「別に違うさ」

「ふーん」

待つてなにその態度ちょっとやめていただけます? まさか本当に俺に気があるとかじやないよね? お願ひそこ答えて。これからのお前との関係を見直さなきやならないから。

いろいろぐるぐると考えてると新平がさつきの続きを言い出した。

「さつきの答えだけど、男の子からはだいにんきだよ！ やっぱり可愛いからかな？ 休み時間はたくさん席に集まるんだ」

まあ、予想通りだわな。

「なんか大変そうだな」

「そうかな？ あ、でも今日は違つたんだ」

下駄箱で靴を履き替えながら話を聞く。

どうでもいいけど1番上にあるとマジ取りづらい。

「なんか教室でね女の子とお話ししてたんだ。そしたら一緒に帰つていったから友達できただんなーって」

「……」

それは…違うだろう。

昼の一件と今回のこと。行動が早すぎる気もしなくはないがありえないというわけでもない。

もし、現にいま事が起こつてゐるのだとしたら…。

ここでなにもしなければしないなりの答えがでて、雪ノ下雪乃是自分で対処をするのだろう。一度しか会つてない俺が彼女のために何かをする方がおかしい。しかもその一度は一方的であり相手はこつちの顔も知らない。

あれ、これって会つたつて言わなくね？

「どうしたの？」

だが、どうしても頭によぎるのである。彼女がこれから背負う運命を。容姿がいい。頭がいい。人はこれを褒め、そして羨ましがる。

『天は二物を与えた』そう言つて持ち上げるが実際は同時に『天は試練も与えた』ということになるだろう。

なるほど。どんなものにも対価があるつてか？ 神様も酷なことをするもんだ。

彼女はそれを望んでなどいない。だが、そんなの関係ないとばかりに世界は彼女に牙をむく。人より優れていることは時として仇になる。頑張っている人が損をするなんて当たり前。この世界は彼女に優しくない。

——だから

1人くらい彼女に優しくしたとしてもなにも問題なんてないはずさ。

「ねえ！ どうし

「悪い」

踵を返し

「用事できた」

駆け出した。

——ベ、べつに助けたわけじゃないんだからね!! 世界の意思に反逆したいだけなんだから! か、勘違いしないでよねつ!

くだらないことを考えながら。

\* \* \* \* \*

「はあはあ」

階段を駆け上る。

新平の話からするとすでに少女たちが何らかのアクションを始めている可能性は極めて高い。

なぜ俺が迷わず現場に迎えているか? そんなのは俺のスペックを見直してから言つてくれ。おかげでめちゃくちゃ疲れてんだよ。

場所は理科準備室前。以前と全くの同じ場所とはわかりやすい。

以前と同様の立ち位置で止まり様子を伺う。

「ねえ、貴女とハヤトくんってなかいらしいね」

「別に…ただ親同士が知り合いなだけよ」

相手は意外にも1人。

「嘘つかないでよ! あなたもハヤト君が好きなんでしょう? そうなんでしょう!」

その大きな声にか、それとも問い合わせられた内容にか判らないが彼女は顔を顰めた。  
 「貴女が誰からなにを言われたのか知らないし興味もないけれど、そんな一方的な貴女の暴論に付き合えるほど私は暇ではないわ」

相変わらず小学生が使う言葉には大人すぎる反論は冷ややかで鋭い。

「なつ、ふざけないでよ!!」

雪ノ下雪乃はふざけてなんかない。彼女には本当に心当たりはないのだろう。だけど恋は盲目であり、それは恋敵に対しても適用される。排除しようと除外しようと他の感情が少女の胸に疼いているのだ。

だから認められない。いま自分が必死になつて排除しようとしている相手が実は恋敵じやなかつたなんて考えたくないのだ。少なからず少女はこれが悪いことだと理解しているのだろう。だが恋敵であるという彼女にとつての敵対理由が少女を動かしていた。

「お、お前のそういうところが…」

けれどそれを否定されて理由を失つた少女はどうするのだろう？ 最後の彼女にとつての正当性が失われた時どうするのだろう。答えは簡単だ。いつだって自分の正当性が打ち砕かれた人間は自暴自棄になるもの

なのだから。

「だいつきらいなんだよ!!!」

ポケットから取り出されたのはハサミと『コンパス』。彼女がいては自分が報われないという思いが、『選ばれなかつた時』の恐怖が少女を突き動かす。

「お前がいなければっ!!」

理不尽な猛威が振るわれる。彼女は先程から黙っているがその瞳には『呆れ』と『怒り』の感情が表れている。

間一髪で避ける彼女はやはり怖いのか足が震えていた。

まだだ、まだこのタイミングじやない。

「貴女のそれはただの自分よがりよ」

彼女の冷たい声が波を打つ。

「周囲のことを顧みず、自分に都合のいいことばかり考えて損得感情でしか動けない」  
凜然と少女の前に立つ。

「私に対していくら怒つてもなにも変わらない。誰も変わらない。努力の方向性を間違え他人を傷つける貴女が他人から好かれることがあるとでも思つてゐるの?」

彼女は怒つてゐるのだ。なぜ優れている者が排除されなければならぬのか。理不

尽な理由で悪意を向けられなければならないのか。

「貴女は間違えたのよ。だから貴女のそれはただの独りよがり、自分勝手のただの我が儘。その甘い考え…ひどく不快だわ」

瞬間、周囲の空気が凍る。それは比喩ではなく実際に固まり、徐々に氷の槍が形成される。

冷気は雪ノ下の周りを守るように囲み、槍の矛先は少女の方へ向いている。

「これは…」

雪ノ下は理解できない。なぜいきなりこんなものがでてきたのか。されどまずは目の前のことから片付けるのが優先事項。

目には目を。歯には歯を。悪意には悪意で。彼女は返す。

「いきなさい」

赴くままに指示を出す。彼女はそれが当たり前であると信じて疑わない。

氷槍は少女の数センチ横を通り過ぎた。でもそれで十分。少女の顔は青ざめ体は震え目には涙が浮かんでいる。さながらいまの雪ノ下は本物の雪女に見えるのだろう。

少女は逃げる、恥も外聞も関係なくただそこから逃れようとする。

そんな少女に彼女は言うのだ。

「言い忘れていたのだけれど…私も貴女のこと、大嫌いだわ」

少し微笑みながら言つたその台詞に反応して冷気が拡大する。

「ひつ…」

走り去つた少女。後に残つたのは疲れたような、けれど満足そうな顔の大人びた彼女だけだつた。

途端に氷は霧散する。先程までの冷気が嘘であるかのようにいまの彼女の周りにはなにもない。

「おかしいわね…でないわ」

首を傾げ何度も試行錯誤しようとしている彼女を見て思う。

これで良かつたのだろうかと。

俺がやつたのは極めて単純なことだ。恐怖による連鎖の断ち切りだ。

孤独な人間にも種類があるがそのうちの一つかいかけられることはまずない。同じ孤独でも前者と後者では被害の割合が全然違う。

リーダー格の少女は彼女に恐怖心を抱いたんだろう、そのことで少女が周囲になにか言つたところで子供の戯言と一蹴されるのがおちだ。

結局彼女の孤独は変わらない。遠巻きに見られることがなくなるわけでも、陰口が減るわけでもないのかかもしれない。それでもイジメは減るだろう。だけど思うのだ。俺の力を使えば彼女の取り巻く環境ごと変えられたのではないかと。そつちの方が良かつたのではないかと。

だけど時間は戻せない、過ぎた時間は戻つてこない。

ふと意識を現実に戻す。そこで

——こつちを見つめる彼女と目が合つた。

# 秘密隠して言葉隠さず

夕陽がアスファルトを照らす中、1人帰り道を歩く。

——貴方のこと知っているわ

あの時、目が合つて固まつていた俺は彼女からの一言でようやく我に返つた。しかしその時には遅く、疑問に思つたことを聞く暇もないまま彼女は去つていつた。いまも去り際の一言が頭に残つて離れない。

——ありがとう

けして大きい声ではなかつた。けれど確かに聞こえたのだ。幻聴ではない、まだ数回しか聞いた事がない彼女の声で。

なにを思い彼女はこの言葉を紡いだのだろうか……。

『ありがとう』これの意味は一般的に考えて感謝を示す。その人を讃える言葉、お礼の言葉。感謝の言葉。

されどそれはおかしい。

俺はまず彼女といままで話したこともなければ面識も一方的な筈だつた。彼女の認識ではあの時助かつたのは先生が来るタイミングがたまたま良かつただけ、今回助かつ

たのは自分が出した不思議な力のおかげ。この筈だつた。

けれど彼女はあの言葉を置いていった。

俺が：助けたのを理解したのか？ いやいや無理だろ。俺が言うのもアレだが随分と非現実的だぞ。

彼女に貸した能力は『もし世界が違つていたならばあつた筈の魔法の力』なにが出来るかもわからない。出たとしてすぐに使いこなせるかもわからない。そんな不確定要素満載の賭け。

俺が一から十まで助けるのなんて簡単だ。それじゃあ意味がないと俺は言つた。

与えたのはキツカケ。使いこなしたのは彼女。そしてそれを元に抜けだしたのも彼女だ。

氷のような人だと思った。その雰囲気の冷たさも、口から出る毒舌も、凝り固まつた価値観も、そしてその意思も。まるで氷のごとく堅い。

そんな彼女がお礼を言つたのだ。いろいろ考えても仕方ないと思わないか？

結局答えの出ないままその日一日を過ごした。

翌日の朝、いつものように目を覚まし朝食を食べ何事もなく学校に到着する。そこそこまでは何事もなく。

「あら、貴方つて結構来るのが早いのね」

…

なんでいるねん。

「そんなところで固まつていないで早く自分の席についてはどうかしら」

…

お前座つてんじやん。

そんな感情は表に出さずに彼女に言う。

「ああ、昨日の女の子じゃないか。どうしてここに？」

筈。

「貴方に用事があつてきたのよ」

「へ？。なんの？」

大方、なぜ昨日あんな場所にいたのかとか、あのことは秘密にとかだろうけど。

「あの力」

「え？」

「あの力はなんなのか教えてくれないかしら」

…え？ なにこの子なんでそんな確信持つた感じで聞いてこれるの？ まっすぐ

に俺が知つてゐるに決まつてゐみたいな顔で。別段なにか証拠残したわけでもないと  
思うんですけど。

「ごめん…。力つてなに?」

「貴方も見たのでしよう? 私に急に出てきた氷、不思議な力のことよ。私以外の目  
撃者はあの子とあなただけ、そしてあの場で関係者じやないのはあなただけよ。犯行現  
場に再び現れるなんて犯人の特徴じやない。なにか知つてゐるならあなたが一番怪し  
いわ」

それに、と彼女は続ける。

「あなたは知らないでしようけど昨日の昼休みにもいたわよね。私あなたが階段から  
降りるの見てるのだけれど」

だが、それでは証拠として弱い。

「偶然だよ。あのルート、時々通るんだ」

「惚けるのもいい加減にしなさい。貴方があの時真似たであろう先生たちの会話、松  
下先生は社会の教師よ。理科準備室どころか顕微鏡など使わないと思うのだけれど」

「……」

おい!絶対記憶仕事しろよ!

アレですか? 能力は最強だけれど頭の方は出来が悪いまんまなんですねありがと

うござります。

……なんて現実逃避しても意味ないよな。

ここで能力使つて記憶の書換えなんてやるのは簡単だけどそれはしない。彼女はあの場にいた主役であり被害者であり加害者でもある。ことの真相に自力で近づいて見せたのだ、たとえそれが俺の凡ミスだととしても結果には変わりない。ならば彼女には知る権利がある、そして俺は教える義務があるのだろう。このまま能力を使い続けて嘘に塗れる人生にはなりたくない。墮落していく末路しか見えない。

止めてくれる人が、戒めてくれる人が必要だ。

これは俺にとつてもプラスになり得る話だ、彼女は毒舌である。つまり思つたことをしつかりと口に出す強い意志が素で表に出ているということだ。それはきっとこの先俺が楽な方へ行こうとした時止めてくれるセーフティロックにたる存在。

誰しも孤独には勝てない。1人がいいなんて嘘に決まってる、強がりの下に潜む俺たちの本音が素直に表に出ないだけだ。何年も何年も表に出ることなく蓋を閉められ鍵がかけられ錆びて固まる。そんな臆病な本音が前に出ないだけ。本当は仲間を求めるのに友達を求めてるのに傷つくことを恐れてる。ただの弱虫。

俺には友達がいる。されど秘密は喋らない。

彼女には友達がない。だからなにも話せない。

種類は違えど同じ孤独。

共有者には存外びつたりな人選かもしれないな…。

「それで…どうなの？」

少しばかり不安そうに聞いてくる。やはり先ほどの推理では無理があることくらい彼女は理解していたのだろう。けれどもそれより興味が勝つた。

彼女は知らないことが許せないのかもしれない。心のどこかで完璧を求めている、そんな気がする。

「いや、話すよ」

まだ登校には早い時間帯、クラスには俺と雪ノ下の2人だけ。  
ここで話しても構わないだろう。

「そう……。なら教えてくれるかしら」

「いいよ、でもこれは荒唐無稽な話だ。もしそれを信じる信じないに関わらず誰にも話さないことをここに、誓ってくれ」

言葉だけなんて意味はないのかもしれない。それでも俺は確かな言葉が欲しかった。  
「いいわ。私は…雪ノ下雪乃是絶対に誰にも話したりしない。……これでいいかしら？」

目をつむり己の心に誓うように言葉を紡ぐ彼女はとても綺麗だつた。

「ああ、上出来だ」

俺は彼女に力のことを話した。

「…驚いたわ。つまり貴方は魔法のようなことができるというわけね」

「まあ、そんなとこだ」

彼女に話したのはあの時雪ノ下が発現させた力と声帯模写のみ。けれどインパクトは十分にあつただろう。

「けれど、そうね。貴方が貢献したのは事実なのだし…」

雪ノ下は顎に指をあて何か考えている。

「こういう時、なんて言えばいいのかよくわからないのだけれど……」

目と目が交差する。

「ありがとう」

目に映った彼女の微笑みはとても綺麗だつた。

あれから幾分か時が経ち現在は10月も後半に差し迫つてきたあたりだ。

今までの期間我らが担任のやり方は変わらず、取捨選択ばかりの毎日を送つてきていた。その結果は問題児と呼ばれていた子達は我慢を知らず脱けだし、騒ぎ出し、暴れ出

す。最後は他クラスの男の先生が出てきて騒ぎを収める。担任の出る幕なんてない。

そして今はLHRの時間。

俺たちの担任の先生交代のお知らせである。

前から話していた通り、やはりこの先生は途中でドロップアウトすることになりそうだつた。

先生は話す。

「先生が…いけないのでしょうか」

目に涙を浮かべながら小学3年生に問う。

もう一度言おう、『小学3年生』に『涙』を浮かべながら話しているのだ。普通は逆だろ。

その問いに答えるとしたらこう言えばいいのだろうか。『先生は悪くないよ！ 悪いのは僕たちさ！』

バカも休み休みいつて欲しい。そんな慰めの言葉をかける小学3年生はともかくとして、かけられる先生が存在していいわけがない。

『先生は…頑張つたけどもう…無理です』

『頑張つた』なんて笑わせてくれる。先生は使えないだろ。それは本当に頑張つている人たちへの冒涜だ。先生がやつたのは自己の保身。私はこのぐらいやつた、だからそ

れで治らないのはあの子達。だから私は悪くないと、悪いのは子供たちだと思い込み、手がつけられなくなれば放棄する。

『教育者』とはなんだろうか。字のごとく教え育てるものだと俺は考えている。先生は大切なことを教えても、そしてそれを糧にして子供たちを育てることもできていない。自分の役職を、役割を全うできない、否やろうともしていない人間が『頑張った』なんて使つてはいけないのだ。

雪ノ下雪乃は『頑張った』

自分の理想に届かせようと、妥協などせずに上を目指していたのは見ていて明らかだ。それに加えて他者からの嫉妬を一身に浴びた生活からのストレスにも耐え抜いた。彼女は頑張ったのだ。それでも彼女は何も言わない。『大変だった』『疲れた』『もうやめたい』なんて弱音は吐かない。たとえ思つていたとしてもそれを口には出さない強さがある。

だからこそ軽々しく『頑張った』なんて口にしてほしくはない。

「先生」

今まで静まり返つていた教室内に俺の声が嫌という程はつきりと響き渡る。

「え…と。朝霧君何かな?」

なにを戸惑つてゐるのか知らないが言いたいことを言わせてもらおうか。

「あんた人生舐めすぎ」

空気が凍つた。

その字のごとく室内の温度が一気に下がったような錯覚が起きる。

今から言うのは先生から見たら自分の四分の一程度しか生きていらないガキの言葉。大多数の人間は世の中を知らないが子供が何を言つてゐるんだと言われるかもしれない言葉。されどその中身は前世で生きた20年と今世で生きた9年が詰まつたまちがいなく『本物』の俺の言葉だ。

「先生、さつき頑張つたつて言つたけどなにを頑張つたの？」

俺は続ける。

「子供つてさ、よく見てるんだ。他の子と比べて自分の怒られた回数が多いとか少ないとか。あの子はいいのになんで自分だけとか：ね」

「先生さ、選んでるでしょ」

真剣に先生と目を合わせる。

「なにを言つてるの？」

「教える人を。行儀がいい生徒は手のかからないいい子。だからしつかりと教えよう、寝たら注意しよう。でも行儀が悪い生徒はもういいや、どうせ教えても意味ないし。つてね」

「そ、そんなこと」

「ないなんて言わせない。今まで見てきたけど先生は寝てる生徒を放置するよね、わかるよ面倒くさいの。でもね、ここで先生が折れたらみんなの未来はないかもしないんだ。教育者なら知ってるはずだこの時期は大変だつてこと、このクラスがどういう生徒が集まっていたかなんてことも」

「それは…」

「注意したって？　たつた1回の注意で治るならこの世に大きな間違いなんて起きないよ。大人だって何度も間違うんだ子供がそう簡単に治るわけないだろ。あんたは我が身が可愛かったんだよ。このクラスを任せられた時ベテランだから大丈夫なんてレツテル貼られて、でもそれを破るのが怖くてだから生徒を理由に逃げようとしてるだけだ。俺たちをあんたの保身に使うなよ」

「そんなこと？」

「やりきれないなら初めからすんなよ」

「…つ」

「社会人なんだろ。自分の責任も果たせない奴が！教育者なんて名乗つてんじやねえ

！」

「先生はついに涙を流す。

おいおい、これじやあどつちが悪いかわからないな。まあ、言いたいことは言つたし間違つてるとも思わない。

晴れやかだつた俺の心に曇りがさす。

「おい！それはないだろ！」

いつだつて葉山隼人は正義の味方。

本当はどつちが悪いかなんて関係ない

この場面泣かせたのは俺、泣いてるのは先生。

だから彼は立ち上がる。

葉山と俺の目が

交差した

途中から空気の人物は気づいた時には既にフェードアウトしてゐるものを

「朝霧：訂正してくれないか」

葉山にしては珍しく怒氣を含ませながら発するその言葉。しかし俺にはどこ吹く風である。

いきなり出てきてなにをほざいてやがる。

「なにを：訂正しろって？」

俺は自分の言葉が絶対に正しいなんて言えはしない。けれど間違つてるとも思つていい。言いたいことは言つたし現に今まで怠慢していたのは先生だ。訂正するべき箇所などない。

「先生は俺たちのために今まで一生懸命やつてきてくれたんだぞ！？ あんな酷い言葉言わなくたつていいだろう！」

俺の悪びれない態度に腹を立てたのかついに言葉を荒立てる。  
だが、

「おい」

いまの俺も相当腹が立っているのだ。

「一生懸命つてなんだ？」

「だから、それは今まで俺達のために」

『俺たちのため』？ 寝言は寝て言え似非勇者。その俺たちの中には誰が入ってるんだよ。お前の言つてるの『俺たち』つてのはどこからどこまで指してるんだ？ お前のさじ加減一つで決まる枠を、勝手に決めてんじゃねえよ

いつだつてグループの中心人物は公平に、平等に、みんなに不満がないように行動しようとする。でもそんなの理想論に過ぎない。誰かが報われれば誰かは不利益を負う。それなのに彼らはさも多数決で決まつたことをみんなが納得した上で決めたことのよう振る舞う。それと同じだ、いつだつて自分の言葉が全員の言葉だと、代弁者だとう思い上がりがさつきの言葉の発生源だ。

「そ、それは。でもだからと言つてあんな言葉を投げかけていい理由にはならない！ それが朝霧の気持ちだとしても人に言つていいくわけがない！」

葉山、それは反論として正しくない。

「その結果がこれだろ？」

そう、伝えないことは善ではない。

「なんだと？」

訝しげな顔でこちらを見つめる葉山の視線は険しい。

お前はわかつていない。ここまで事が深刻になつたのは『言葉が足りなかつた』からだということを。

「人に、物事を教えるのが教師だ。世の中の善惡の判断を教える。そのことをこの年頃に限らず教える方法なんて言葉か行動ぐらいしかない。」

葉山、先生には足りなかつたんだよ。思いを伝える言葉が、行動が、先生には足りなかつたんだ」

俺は続ける。

「言葉を投げかけちゃダメ？ 悪いことをしたら指摘するなんてそれこそ小学生でもしつてるだろ。」

人に言つていいわけがない？ 言わなきや伝わらないだろ。小学3年生に表情から察しろなんていう方が難しい、気持ちを言葉に込めなきや、わかるわけないだろ」

「でも、だからってなにも泣くまで言う必要はなかつたはずだ。仮に朝霧のいう事が正しかつたとしても君ならもつと言葉を選べたはずだろ！」

たしかに、葉山の言う通り言葉を和らげるることはできたかもしない。だけどな

「途中で生徒を放棄しようとした担任に、生徒が見切りをつけないわけねえだろ」

甘つたれんじやねえ。ここまできたのは自業自得、先生の能力不足が問題だつた。早めに手を打つことだつてできたはずだ。事を大きくしたのは他でもない先生自身だ。けれど葉山はうつむかない。いまだ俺の目を見て離そうとしない。

「それでも俺たちの担任は河原先生だ。今まで先生がこのクラスの為にやつてきてくれたことが無くなるわけじやない。悪いどこもあつたのかもしれない、けれどそれだけじやないはずだ。足りないどこばかりに目を向けてこれまでの事を否定するのは：間違つてゐる」

俺は葉山を、葉山は俺を。決して逃さないという強い意志が視線を交えてぶつかり合う。

「責任を果たせない大人が、子供を導く資格なんてない。たとえ今までクラスに貢献しようとしていたとしてもそれは円滑に担任をやめるための言い訳作りにしか思えない」

「それは違う。どうして君はまつすぐに見れないんだ！　俺たちが今までこのクラスでやつてこれたのは少なからず河原先生がいたからじやないか！」

それは正しくない。

「葉山、少し間違つてゐるぞ」

「お前の言う通りまがいなりにも今までクラスとして機能していたのは先生がいた

からだ。だがそれは決して

『河原先生じゃなきやだめだった』とは思えない』

「朝霧つ！」

「先生だつたら誰でもよかつたんだよ。ただいるだけなら誰にでもできる。教育者に求められる力は生徒からの信頼を確立し、個々の能力を伸ばそうとする高い教育意欲だ。生徒を素行で判断し、態度を変えるような人に当然信頼なんてないし意欲があるとも思えない。

この時点では先生が担任でなきやならない理由どころか教育者としてふさわしいとも到底考えられるものじやない』

感情が溢れてくる。一度吐きされたものを後から完全に戻すことなどできはしない、けれど言葉が次々と浮かんでくる。

だから退き際を誤つた。

俺は、

先生に振り返りその言葉を吐いた。

「泣きながら生徒に辞退を訴えるくらいなら、初めから担任なんて名乗らないでくれませんか。正直、鬱陶しいです」

言つてから後悔した。今のは言わなくていいことだった、余計な一言。されど後悔な

ど既に意味をなさない。言葉の暴力は物理より時として凶器になる。誰しもが使える凶器、それを俺は雪ノ下の一件で学んでいたはずだつたのに！

「朝霧つつ……！」

憤怒の表情で俺の胸ぐらを掴みかかつてくる葉山。

お互に既に冷静な状態ではなく心の中では幾重にも重なる想いがあつた。しかし2人はその激情とは裏腹に睨み合つたままその場を動かない。

しかしそれも唐突に終わりを迎える。

扉が勢いよく開かれたと同時に大きな声がクラスに反響した。

「なにを騒いでいる！！……お前たちなにをしてるんだ！」 河原先生もなにを惚けているのですかつ。すぐに辞めさせましょう！」

騒ぎを聞きつけた隣のクラスの担任が俺と葉山を引き離す。

お互いの視線は依然として交わり続ける。

その視線は言外にこういつてるかのようだつた。

『お前（君）とはわかりあえない』

しかし、長い睨み合いも終わりを告げる。

「お前たちもいつまでも睨み合つてないで、なにがあつたか話してくれないか？」

河原先生も状況説明のほうお願ひします」

河

その後その場では軽い事情聴取だけで終わり、放課後に呼び出された。

その後結果として残つたのは前世通りの担任交代と葉山との確執というものだ。後味が悪いなんてものじやない。本来ならあのまま先生は泣きながら俺たちに担任を降りることを話して後日交代する予定だつた。

しかし葉山と俺という2人のイレギュラーによつて事は大きく変わり即日交代。次の日には別の先生がやつてきた。

この一件で自分の精神的未熟さが大きく浮き彫りとなつた。

たとえどんな力を持つていたとしても、様々な経験を積んできたとしても、感情を抑えられない人間はその力を十全に発揮できない。

やり直す力を得たはずが、やり直さなくていいところまで壊してしまう。一度きりのタイムリープはもう来ない。

もう少し心に余裕を持つて過ごそう。

そう心に誓う一件だつた。

冬も終わりに近づき寒さも徐々に和らぎ始めたこの頃。

長かつた小学校生活も終わりを迎える。

卒業式の最中、代表挨拶をする雪ノ下雪乃を見てこれまでの出来事を思い返す。

担任交代後は特にあげる事はなく平穏に過ごした。

四年生進級時には男女の意識がつき始めたのかソワソワした落ち着かない空気が終始あり、それに伴つてある事件があつたのだがそれは後々語るとしよう。

落ち着かない空気を残したまま進級した5年生時には綾ちゃんと雪ノ下、加えて葉山と同じクラスになつた。両方とそれなりに親しくしていた俺と昔からアプローチをかけていた葉山でなんとも気まずい空気の中1年を過ごしたものだ。

そして6年時、どんな心境の変化があつたのかは知らないが葉山が俺と次々と競うようになつていた。

勉強、スポーツ、裁縫、料理、様々な分野で俺に勝とうとしていたのを覚えている。結局はスペックの違いで俺が圧倒していたが彼の執念には並々ならぬものを感じた。

しかしそんな毎日も今日で終わる。

幼稚園時代から仲が良かつた新平達とは学区が同じということもありまたも一緒に中学に入ることが決まつている。

葉山に関しては特に情報が入つてこなかつたのでよくわからない。

雪ノ下に関しても同じだ。彼女との関係はとても不明瞭なもので知り合い以上友達未満であるが、秘密を共有していることからある種の信頼関係が出来上がつていて。かといってお互いのプライベートまで関わる事は稀であり今回の進学先も知らされてい

ない。

良くも悪くもこの小学校生活ではいい経験を積むことができた。自分とは噛み合わない奴との遭遇も、2度とやり直せない失敗も、自分の弱さの発見も。今の俺を一段階上に上げるための糧になつたと考えればなかなかいい思い出に見えてくる。

### 「卒業生退場」

各クラスの担任の合図で一斉に立ち上がり1人1人が堂々とレツドカーペットの上を歩いていく。

在校生の合間を通り過ぎ、保護者席を通る頃俺の父と母がカメラをこちらに向けているのが見えた。

やはり、支えてくれる。自分のことを見てくれる人というのは大きいものだ。些細なことでさえ嬉しく感じられるのだから。

人は孤独には勝てない。

いまも彼女が孤独なのか、はたまた俺は手を取ることができたのか、それは彼女しか知らないのだろう。

でも、俺に向けてくる家族の笑顔を見ていると思うのだ。

いつか彼女が心から笑顔をむけてくれる日が来てほしいと。そんな自分になりたいと。

卒業してから数日が経ち現在は春休み中盤。あの後まだ携帯も持つていない俺たちに連絡を取る手段などなく最後に言葉も交わさないまま終わってしまった。

また、道が交われば会える。そうでなければこれで終わり。ドライな考え方かもしれないがダラダラといつまでも考えていたって状況が変わるわけでもない。

次の舞台は中学。一気に大人へと上がる時期。そしてもつともトラウマが植え付けられる時期だと考えている。

葉山のようなイレギュラーがいないとも限らないし、それによつて生じる弊害だつてあるだろう。

前の俺なら不確定要素なんて不安の種としか考えなかつたかもしけないが今の俺はそれすらも糧に変えようとしていた。

心境の変化なんて人によつては一瞬だ。他人にとつてはどうしようもないことでも受け手が変わることによつてイメージは大きく変わる。

雪ノ下雪乃が少しだけ俺に歩み寄つたように

葉山隼人が俺に対抗意識を燃やし始めたように

秋沢新平がヤンからホモに移り始めたように

俺も少しだけ変わつたのかもしれない。

85 途中から空気の人物は気づいた時には既にフェードアウトしてるもの

次の舞台はここ、  
総武東中学。

## 愛、反する

中学校とはそもそもどのような場所だろうか。

小学校を上がりそれなりに知識をつけ、社会というものをなんとなくだが理解し始める。その過程には社会へのアンチテーゼを唱えるいわゆる『厨二病』の発症もあるのは有名な話だろう。

それ以外にも『性』というものをはつきりと意識し始める時期もある。男と女の違ひなんてこの頃からようやく保健体育を通して習い始めるのだ、それは意識もするというものだろう。男はようやく女よりも背が高くなり始め、女は身体つきが変わつてくる、それに伴つて必然的に必要になるのが保体だ。が、これによつて増えるのは何も知識だけではない。いわゆるリア充という奴もこの頃から急増し始める。『あの子可愛いな』から『やべ、興奮してきた』に変わる。そんな多感な時期が中学校生活である。いろいろな経験や失敗が一気に入つてくることによつて心はいやでも成長を遂げるのだ。

男の子は男になろうと、女の子は女になろうと。学校という小さな社会での舞台を経験しながら自分を高めていく土台作りがこの中学校生活だと俺は考へている。そんな中学校生活で大切なのはやはりスタートダッシュである。

クラスのメンバー次第ではこの先の生活が真っ暗なんてことはよくある話。自己紹介でミスなんてしたらもうクラスの日陰者扱いをされる。

いわゆる中学最初の一大イベントが真っ先にやつてくる。小学生とは違うのだ、なまじ半端な知識を身につけて言葉のレパートリーを増やしているクソガキ共は、覚えたてのワードで俺達に傷を作っていく。

やれ『ウザい』だの『キモい』だの言いたい放題言いやがる。なんでも略せばいいってもんじやねーんだよ。

それにこの頃から多用かされるのが『死ね』である。本来なら使つてはいけない言葉、親からも『言つちやいけません!!』とか教えられる言葉一位にランクインしている言葉だ。それを最近のガキは気にくわないことがあればすぐに使う。挙げ句の果てにはコミュニケーションにまで用いられる。そういつたことがハードルの位置を徐々に下げていき今に至るのがわかつていない。

そんな暴言溢れる中でデビューに失敗でもしてみろ：あ、ヤバい腹痛い。

綾ちゃんや戒、新平とはそれぞれ別々のクラスになつてしまい残されたのは俺一人。新天地が楽しみなのは俺もわかるがやはり期待値が高いだけに不安も相乗して高くなる。

今日からお世話になる1—3のプレート眺めながら決心して中へと入る。

以外にも中にはそれほど人は多くなく、なにより中は廊下と違ひ驚くほどに静かだ。  
まあ、みんな緊張してんのは当たり前か。

大抵初日はクラスが葬式になるのは恒例のことだと思う。時々ムードブレイカーが  
いて一気に和気藹々とした感じになるがあれは例外だ。あれができるのはイケメン  
じやなくバカだけである。しかも空気を読めないんじやない、読んでて敢えて壊すの  
だ。そういう奴は以外にもやるときはやる奴が多いからなかなか好感が持てる。  
自己紹介のことを考えながらも席に着き荷物を下ろす。

当然のことながら席順はあかさたなで決まっており俺の番号は2。

よかつたわー。1番とか最悪だからね。トップバッターとか何話せばいいかわから  
んしら。俺は何事にも例題がないと解けない男なんで。

徐々に席も埋まり始め時計の短い針が9を示すと同時にチャイムが鳴り響いた。  
「よつしお前ら席につけー」

入ってきたのは金髪逆髪ちよい髪といつた感じのぱつと見では教師に見えない男。  
「今日からお前らの担任になる近藤 正義だ。よろしく頼むぞ」

腕を組みながら眼光鋭く俺たちを見るその風貌はヤクザにしか見えない。  
「まあ、初日で緊張するのもわかるが気楽にいこうや」  
いえ、これ半分はあんたに怯えてるだけだから。

その後、講堂に移動しての入学式を終え教室に帰つてくる。入学式の日特有の注意事項の説明や教科書配布などもつつがなく終了しいよいよ本命へと移つた。

「さて、お待ちかねのアピールタイムだ。端から順番にやつてけ」

そう言つて指されたのは俺の前の席。つまり出席番号1番である。

「は、はい」

可哀想に始めの奴は大抵みんなの礎だ。先生にチラチラ助けを求めるながらやつと自己紹介を終えたとしても内容なんてまるでみんな覚えてなくて、必要なのは覚えてるのは話す手順のみ。オマケにみんな要領よくやるものだから自分だけ無駄に多く時間取つたと思われて…。

だが、同情はするが変わつてはやらない。だつて俺、自己中だもの。自分が1番だもの。

「え、えと僕が」

なかなか進まないのに業を煮やしたのか先生が助け舟を出す。

「なんでもいいぞー。好きな食べ物とか女のタイプとか拘りのフェチズムとか」  
それ自己紹介でする内容じやないじやん。

「え、えとじやあ。好きな食べ物は『マカロニサラダ』です」  
——です

——サラダです

——マカロニサラダです

「おい、ちょっとお前表出ろや」

反逆者を連れて外へ行こうとする。

「おい、待て待て。どうしたお前何しに行くつもりだよ」

先生が慌てて止めてくるが今の俺にはきかない。

「先生ちょっとそこどいてください。マカロニサラダを倒せません」

「俺はお前が何を言つてるのかわからないんだが」

「白いアイツが、奴が、来るんだ」

思い出しだけでも気持ち悪い。トラウマの元を消したつてそのトラウマが消えるわけじゃない。

「なんだお前。中学生にもなつて好き嫌い1つでそんなムキになるなんてまだまだ子供だな」

「俺、好き嫌いもはつきり言えない意志の弱い男にはなりたくないんで。座右の銘は『マカロニには死を』『サラダには救済を』なんで」

そう、サラダ単体には罪はない。全てはマカロニ奴のせいだ。

そんなこんなで自己紹介は進む。

「うだ

あ、やべえ全然話聞いてなかつた。今のやつ誰だ。

「おい、誰か玉縄に質問あるやついるか？」

へー。玉縄っていうのか。直訳すると Ball Rope。玉縄よりこつちの方断然覚えやすくな。もう明日からロープ君で良くね。

それにしてもアツなんであんな手をラップさせてんの？ 手話大好きなの？ ハンドサインとかやつちやうの？

「おし、次で最後だな。」

クラスの目が一斉に最後の人に向く。トリといいうものは初めと同じでなかなかやりにくいものがある。

そんな考え方をしている中でも自己紹介ははじまる。

「はい。四葉 詩音と申します。皆さん宜しくお願ひしますね」

—— 雪ノ下雪乃が氷でできた美しい氷華なのだとしたら。  
—— きつとこの人は空に咲く幻想的な花火だ。

そう思えるほどに可憐であった。

「特に好き嫌いはありませんけれど、強いて言うならば紅茶には詳しいですね。あ！ 最近はチョコレートにも凝つてるんです。今度持つてきますね」

1つ1つの仕草が彼女という素材を光らせて いる。きかずともわかるようなお嬢様然とした雰囲気。されどそれは高圧的なものではなく包み込むように柔らかい。

一度見たら雪ノ下同様、2度と忘れる ことはない容姿だ。

そう、一度見たら2度と忘れない容姿なのである。言いたいことは理解できたと思うが彼女はイレギュラーである。ついでにロープ君も。まだ自己紹介の段階ではあるがその存在感は他者を圧倒するのではなく、引き込むことによりその領域を広げている。キヤラの濃さは相当なものであり、これから過ごす上で未来を容易に変えてしまう影響力を持つているのは明らかだ。そしてロープ君。彼もなかなかのテクニシャンな動きで俺達を翻弄してくれた。彼がいることによつてどんな未来に変わるのかわからないが行動には気を配つておいて損はないだろう。

俺には俺の生き方がある。やり直したい過去があるのだ。それが他人にとつて些細なことだとしても、俺は俺自身で精算をつけたい。

中学にだつてそのうちの何個かはあるのだ。邪魔されるのは御免だ。例えそれが本人の望む望まないにしろイレギュラーというものは何故か俺の周りに集まる。警戒するには当然と言えるだろう。

放課後、今日は午前で終わりということでまだまだ時間的余裕はある。新平達を誘つ

て遊びに行こうかと考えていると後ろから声がかかる。

「あの。ちょっとといいでしようか」

振り向いた先にはくだんの少女。四葉詩音。

「何か用事？」

少々そつけない返事となつたが許してくれ。これが俺の限界だ。

「ええ、ここではあまり言いたくありませんので中庭にでもいきませんか？」

入学初日にもかかわらず見取り図も見ないで校舎の中を進む。靴を履き替え中庭に出たところで彼女が口を開いた。

「貴方のこととは実は知っておりますの」

…は？

「え？ 俺は知らないんだけど」

そもそも出会うきっかけすらない。

「ええ、それは仕方ありませんわ。此方から一方的に知っているだけですので」

微笑みながら言う彼女はやはり同年代には見えないほどに美しい。

「緊張なさることなんてありませんわ。ただ個人的に興味がらあつただけですので」

「はあ」

生返事しか返せなくてすいません！

「話は変わりますが：私は生まれた頃から身体が丈夫とは言い難いほどでした」

「一つ一つの言葉を丁寧に重ねていく。」

「喘息を患つていて、あまり激しい運動もできず。それに加えて私は旧家の娘。両親からも大切にされてきたと実感しておりますし、そのことには感謝の念しかございません」

なぜ、出会つて間もない俺にこんな話を？ そういった疑問が湧き上がる。

「小学校に入学しても毎日の登下校は車での送迎が当たり前。車の中では特にすることもありませんし、私はよく窓の外を見て時間を潰していました」

「流れる景色の中にはいつも同年代の子達がいました。お友達と話しながら、笑いながら話す人たちを見ていると、やつぱり辛くなるもので『もし身体が強ければ』なんて考えてしまふこともあります」

「旧家に生まれた私は一般家庭の生活基準を知らず、結果としてクラスには馴染めませんでした。たくさんのひとが話しかけてくれます。だけどいつもどこか一步引いてるんです」

そんな中、ある少女に出会つたと彼女は言つた。

「(一)の周囲一帯を取り仕切る名家や旧家のパーティーで私はその子に会いました。

誰も寄せ付けない、けれど心の中では誰かを求めていた。毛色は違うかもしませんが求めていた点では同じだった私はすぐに彼女の心に気づきました」

しかし、と彼女は続ける。

「仲良くなろうにも彼女は此方に興味も向けてくれません。『傷を舐め合うことに何の意味があるのかしら』って言われちゃったんです」

「そこからいろいろなアプローチをしても雪ノ下は靡かなかつたという。

「同じ孤独を知っているもの同士、仲良くなれると思つていたんですけどね」

それは違うだろう。

当然のことながら四葉と雪ノ下が抱える孤独は種類が違う。雪ノ下は関わりの中で拒絶され続けてきたのだ。誰かと比べられる競争に勝つたとしても残るのは遺恨と怨恨。優秀な人ほど弾かれる。

彼女は常に集団の中での中で1人きり。

対して四葉は関われない孤独があつたのだろう。関わりたくても関われない。みんなが近くに来てくれる、でも誰も私を見てくれない。旧家というものはそれなりに力があるものだということは彼女の話から推察できる。地元でのその影響力は有名会社よりもはるかに上であろう。親が子に挨拶をさせる風習は未だにあるのかもしれない。そんな中親達は子供達に言い聞かせるのだ、『粗相のないように』『怪我なんてさせる

んじやないよ』と。だから一步踏み込めない。それ以上近づけない。家という名の防壁が彼らと彼女の間には立っている。その壁は子供が超えるにはあまりにも大きすぎる壁。

四葉詩音は常に集団の外で1人きり。

たしかに種類は違えど孤独は同じ。されどその性質は正反対。場合によつては一般人が分かり合うよりも難しいだろう。なにせ始まりから違います。環境が違いすぎる。何よりも心の持ち方が違いすぎる。

雪ノ下雪乃は人と関わつたことで『絶望』を見だした。

四葉詩音は人と関わることに『憧れ』を抱いた。

その思いが混じり合うことは正直言つて限りなく低い。

「でもそんなんある日。雪ノ下さんが笑つてるのを見たんです。下校中の車から確かに笑う雪ノ下さんを。そして…その隣にいたのが貴方です」

だから知りたいと彼女は求める。

「私は気になつたのです、どうやつて彼女の冰を溶かしたのか、どうやつて……彼女を笑わせることができたのかを」

買ひ被りだ。そもそも俺は彼女の冰を溶かしてなどいない。せいぜい鱗くらいが限界だ。まだ俺は俺が求める心からの笑みを見てなどいないのだから。

「それが俺をここに呼んだ理由かな」

初対面でいきなり呼ばれて過去話とかレベル高いと思いきや、俺を踏み台に雪ノ下と仲良くやるためか。

「はい」

ここで俺がしたことを話すことはできる。が、それを彼女が実行したところで意味はない。俺と雪ノ下が違うように四葉と雪ノ下も違う。

人生は数式ではない。

人間関係は人の数だけ答えがある。彼女は彼女だけが出来るアプローチをしなければならない。

おれの答えを知つてしまつたらそのアイデンティティを壊しかねない。彼女が持つ孤独をもつて雪ノ下の孤独と向き合わなければならぬ。

ならばまず彼女は知るべきだ。自分の孤独と彼女の孤独が相反するということに。自らの過ちと勘違いを正すべきだ。

だから俺は言う。遠慮なくハツキリと思つたことをストレートにぶつける。

「あんた勘違いしてると。あんたのそれは唯の自己愛の押し付けだ。雪ノ下のためだなんて言い訳するなよ」

そう彼女は雪ノ下の為だなんて思つちゃいない。雪ノ下の孤独がわかる？ だから

心の中で求めてるのが分かつた？ 馬鹿言つちやいけねえ。

そもそも雪ノ下雪乃は求めない。あいつは求めるなんて感情を『まだ知らない』いつだつて求められてきた立場だつたんだ。家からの期待と重圧に、学校での優等生。周りから求められる要望に彼女は答えてきたのだ。そんな彼女だからこそ他人を求めることを知らないしその感情を理解できない。

だからこそ彼女は他人との距離感がわからず戸惑うのだ。 共有者という曖昧な関係でしか線引きをすることができなかつた。

3年間わり続けた俺が彼女の心をわからないのに、たかだか年に何度かあるパートナーで会うだけでわかるわけねえだろ。

「自分と同じだから分かり合えるっていう願望を雪ノ下に押し付けた。レツテルを貼つて自分と同列に数えようとした。『貴女は私と同じだからこの苦しみがわかるでしょう』『私も同じだから貴女の辛さがわかるの』 そうやってあんたは分かつたふりをしていたにすぎないんだよ」

誰しもが群れたがるのは安心したいから。仲間を見つけることによつて1人ではないという心理的余裕が欲しいからにすぎない。

「雪ノ下雪乃は今も孤独と戦つている。他人を引き合いに楽な方へと逃げようとしたあんたに雪ノ下を理解できるかよ」

ヤベエ、別に俺も雪ノ下のこと理解してるわけじゃないのにこんな大口叩いちやつたよ。どうしよ、後で四葉家総出で殴り込みとかこないよね。お嬢様になんて口をおお！とかないよね。

俺の心境なんて露知らずに四葉は口を開いた。  
「世の中に生きる誰しもが：貴方のように真っ直ぐに意志を伝えるわけではありますせん。

回り道をして、遠回りをして、それでようやく前に立つても話せない人だつているんです。伝えれない人だつているんです。例えそれが押し付けであつたとしても、嘘の共通点であつたとしても、それは私にとつてはかけがえのないキッカケだつたんです。

貴方の言葉、私にはいい薬になりました。もう一度しつかり考えてみます」  
けれど、と彼女は続ける。

「貴方のその意志の強さ……私は嫌いです」

最後に、呼び出してこんな話をしてしまつてごめんなさいと謝つて彼女は帰つていつた。

「……」

最後の言葉が木霊する。

人との関わり方を知らないのは四葉も同じであつた。そもそも自ら関わることを知らない四葉が不器用になるのも当然と言えた。関わり方を知らない人間が上手く関われという方が無理なことだつたのになぜそこに気づかない。

雪ノ下と四葉を同列に考えていたのは俺の方だ。人との関わりに憧れていたからこそ臆病になると、尻込みしてしまうと何故思わなかつた。

分かつていないのは俺じやないか。

なぜ俺は、そこまで考えれなかつた。

俺の方こそ相手のことを考えずに話していただけじやないのか？ そもそも俺は四葉のことを何一つ知らない！

心を知つた気になるな？ それは俺の方だ！

「あー……」

知つたフリなんてまさに俺がそうじやないか…。

偉そうに喋つて何様だよ。本当、やり直してきて大人ぶつたところで失敗したら意味ねえのに。

そういうえば今日、まだ入学初日じやん。

ふと見上げる空。

俺の心を映し出すかのように空には曇天が広がっていた。

# その道には影がさす

たとえどんな失敗や後悔があったとしても時間は止まらないものである。道を踏み外した人間が更生しようとも過去の出来事は消えないよう、一生の親友になるかもしれなかつた友をたつた一言で失うように、時間は進み止まらず、戻ることはできない。

言葉の刃で相手を傷つけてしまつたら、その傷は薄れても、小さくあとは残る。

これからも俺があの子に言つた言葉は残るのだろう。心のどこかで破片が燻るのだろう。

だからこそ言葉は選ばなければならなかつた。失敗してはならなかつた。何も知らないまま感情まかせに言つてなどいけなかつたのだ。

失敗してもいいだなんて次がある奴のセリフだ。確かに失敗を糧に成長することもある、それは間違いではないだろう。

でもこの世界にはたつた一度の出来事なんてのがありふれている。

次がないなんてことは大して珍しいことではない。

考えっていても、悩んでいても世界は回る。俺を中心に世界は動かない。世界は世界を

中心に動くのだ。たかだか70億分の1程度の存在にかまけている暇などない。

1年が過ぎ、2年の秋。クラスは変わらず、外面では和気藹々と俺も過ごしていた。

「ここはもう少しバッファをとるべきだと思うんだけど、どうかな？　：朝霧君どうしたんだい？」

考えごとをしていた俺は班会議に集中していなかつた。そのことを玉縄に気付かる。

「あー、悪い。ボーッとしてたわ」

現在の時間は修学旅行の班ごとに見学ルートを決めようという定番のアレだ。各班男女6人制で動くが部屋割りはもちろんの事違う。男子3人部屋だ。べ、べつに残念とか思つてないから本当だから。

「ミーティングには全員でパーテイケーションしないと意味がないよ」

「了解。今からちやんとやるさ」

今のは玉縄。おれがこのクラスで1番接触回数が多い奴だ。そのおかげか知らんが班決めでは特に悩むことなく玉縄からお誘いがかかり今に至る。

「じゃあ、ブレインストーミングからやっていこうか。初めはビジョンを広く持つていこう」

この独特な話し方がこいつの持ち味である。

ぶつちやけ時々うざく感じるのは俺だけではないはずだ。会議は時間一杯続いたが具体的なことは決まらなかつた。

だがまあ、初回の会議なんてこんなもんだろ。

ここで1つ、修学旅行の行き先について語ろうと思う。

旅行先は北海道。日本の最北端であり俺たちが過ごす千葉より断然寒いと噂される場所だ。

有名なのは赤レンガ倉庫群や百万ドルの夜景などだろう。

百万ドルの夜景とか価値観わかりにくいからせめて円にして欲しい。

他にも北陸は海鮮料理が美味しいと聞く。美味しい物が好きなオレはこれが密かに楽しみで仕方ない。

それに加えてもう6年以上会つていなかつた奴にも会える。

【鶯巣ただひと】覚えているだろうか、猿人類の特徴が顔に色濃く出てる男である。

幼稚園卒園いらい、ずっとあつていなかつた彼だが、彼の母親と俺の母親が連絡を取つていたらしく、携帯を買った直人（ただひと）のアドレスが俺に送られてきた。

直人からのメールによると自分が通つている中学も行き先が北海道で日程も被るらしい。

直人が通う中学は総武中央中学。バスケット部に所属しているらしく日頃休みが取れない生活を送っているとか。直に会つていろいろと語りたいものだ。

ここまで俺の修学旅行に対する期待感を語ったが不安も存在する。四葉詩音、再び。である。

俺達の班には彼女がいるのである。あー、一気にテンション下がるわー。あれ以来必要最低限の会話しかしていないし、俺達は大して親しくもない、むしろ苦手まである。

そんな俺達が一緒になつたのは玉縄のせいだろう。ロープ君べつに四葉と俺を繋がなくともいいのに。どうか何事もなく過ごせることを祈るしかない。

「ただいまー」

帰宅して即服を脱ぎ、だる着を装備する。スウェットは神。基本的に家にいるときはこの格好で生活している。

部屋から降りて下に行こうとすると母が俺を見つけるなり、心なしかウキウキしながら話しかけてきた。

「あんたにお客さんつ。きてるわよ」

え？ 先に言えよ。俺もう着替えちゃつたじゃん、もうプライベート丸出しじゃん。  
何故こんなにも機嫌がいいのかわからないまま、リビングへと入ると、  
「あら、ようやく帰ってきたのね。貴方が遅いからせつかくいた紅茶が冷めてし  
まつたわ」

それは俺のせいではないのでは？ 直帰してきたんですけど。……じゃなくてなん  
でいんの？

「固まつていないで早く座つたらどうかしら」

あれ、このくだり前にもなかつた？ なんかデジヤブ。

「てかなにお前寬いでんの？ ここ一応俺の家なんだけど」

ほんと、なに住人より住人らしくしてんの。

「言葉は正確に使うべきよ朝霧君。ここは貴方が買った家ではないわ。貴方のご両親  
の家よ」

面倒くせーよ、こまけーよ。それいつたらお前親族ですらないじゃん赤の他人じや  
ん。

「で？ お前なにしにきたわけ？ てかなんで家知つてんの」

「秋沢君から聞いたのよ。以前に連絡先を交換したのが役に立つたわ」  
え？ なにそれ知らない呼ばれてない。

「あー、家に関してわかった。それで要件は?」

「特にないわ」

は? え、なに? 用がないのにきたの? しかもなんでこの時期?

「なんて?」

「特に理由はないわ」

ふー。落ち着け俺。俺の認識ではプライベートへの干渉はお互いにおこなつていなかつたし、まして家を行き来するような仲でもなかつた。

…なにか家にいられない事情でもできたのか? それとも本当に唯の気まぐれなのだろうか。

「…どうしたんだ?」

「どうもしないわ。ただ、こここの近くを通つたから少し寄つただけよ」

それは苦しいだろう。初めて家に入るのに俺がいることも確認せずにこようだなんてどんな強者だよ。メンタル強すぎだろ。

「いやそれだいぶ無理あるから。俺とお前そんな気安く家に来るような仲だつた記憶はないんですけど」

そもそも、最終的に”友人”であつたのかすらわからん。

「ふふ。懐かしいわね、貴方とよくこうして会話してたものね」

いやまだ1年しか経つてないから、そんな遠くを見つめるほどじゃないから。別段変わった話題もないまま、時間は穏やかに過ぎていった。その後、彼女は最後まで理由を告げることなく帰つていった。

まつたく、帰つてきていきなりのサプライズとかキツいわ。おまけに雪ノ下と話してるとなんか背筋が伸びるから尚更疲れた。

「あんたも隅に置けないわねー」

母ちゃんがなんか言つてくるがそんなんじやない。

「いやべつに違うから、そういうんじゃないから」

アレと付き合う男は間違いなく苦労するだろう。とりあえず両親に挨拶に行く時点で俺なら挫折する。

「それで。どんな話したのよ」

いやなんでそんなグイグイきてんの。なに若さ取り戻した気になつてんの、皺の数は変わらないから。

「別にお互いの近況報告みたいなものだけ」

「ふーん、本当にそれだけ？ つまらないわねー」

なに期待してんのか知らないけど雪ノ下と付き合うとかないから。俺もうちよつと

明るい子が好きだから。

「でもおかしいわね。彼女ここに来た時はどこか思い詰めた顔してたから大事な用事があると思ったのに」

：なんだって。俺の前では微塵もそんな様子なかつたぞ。

「ねえ、本当になにもなかつたの？」

真剣な瞳で見てくる姿に俺はもう一度振り返つてみた。

：考える。今までの雪ノ下とのやりとりになにか疑問点はなかつたか？

：明確に不自然だつたところはなかつたようと思える。話し方も別段変わつてはいなかつた、けれど、動機はおかしかつたように思える。

まずおかしいのは雪ノ下の行動。今までなかつた家に来るという行動を何故小学校在学中ではなく疎遠になつた後に来たのか。

そこで雪ノ下の言葉を思いだす。

『ふふ。懐かしいわね、貴方とよくこうして会話してたものね』

『懐かしい』俺はこの部分に違和感を感じていた。確かに人によつては1年合わなければ懐かしいというかもしれない。

だが相手は雪ノ下。はたして前を向き歩き続ける彼女が過去に未練があるかのような台詞をそう簡単に吐くだろうか。

現に俺は雪ノ下にあつてもそこまで懐かしいという思いはしなかつた。  
 ならどうして彼女はあんな言葉を残したのか。

根拠はない……が、可能性としては……ある。

俺に会いにきたのはなにかしらの繋がりを確認するため。

俺にあの言葉を残したのは過去に未練を感じていたから。

あの雪ノ下が？ 確かにこう思うだろう。でも可能性は0ではない。

俺達と出会い彼女は少しだけ、変わったと思うから。

小学校時代、俺は彼女をイジメから解き放つた。そこから俺達との交流が始まつた。  
 雪ノ下と新平、戒、綾。初めは緊張していたみんなも徐々に雪ノ下がいることに慣れて  
 いった。

いつしか俺達にとつては当たり前であつたが雪ノ下はどうだつたのだろうか。

普通の友人とは少し距離が遠かつたのかもしれないが、それは決してお互いを嫌つて  
 いたわけではなかつたと思える。俺達は俺達なりの付き合い方をできたように感じて  
 いた。

楽しいと感じていた。けれど毎日のようにみんなが顔を会わせることはそう多くは  
 ない。

俺達はこのグループ以外にも友達はいた。

しかし雪ノ下にはそれがない。

だとしたら、雪ノ下にとつてあの空間が心地良いものだつたとしたら。

それを失つた時、はたしてどんな気持ちになるのだろうか。

それに加えて彼女の進学先に親しい知り合いはいない。新天地でまた一人。

人間は繰り返し失敗を犯すことは歴史が証明している。つまるところイジメの再発が起きた可能性は……極めて高い。

『懐かしい』思い出を呼び起こす言葉。

彼女はきっと安心したかったのかもしれない。俺と話すことによつて変わらないものがあると思いたかったのかもしれない。私達の関係は変わらないと。あの空間はなくなつてしまつたわけではないと。

しかし、確認をとろうにもここに彼女の姿はもうない。今のは俺の推測であり、本當はただたんに会いにきただけかもしない。

けれど一抹の不安が残るのだ、もしもまた虐めにあつていたのだとしたら、彼女は昔のようになつた”1人”で乗り切れるのだろうかと。

目の前には冷え切つたティーカップだけが残つていた。

「そう言えば聞いたか？」

翌日のLHRの班会議の途中、直人から貰つた情報をみんなにも教えた。

「へえ。珍しいね、近場の学校の旅行日程が重なるなんてなかなかあるものじやないよ」

「そうだよねー。てかもしかしたら出会いとかあるかも！」

同じ班員の奴らが盛り上がる。思春期真っ只中の年頃なのはわかるがこれだけの話題で出会い今まで考えられるのは少し飛びすぎな気がする。

そもそもあるわけないだろ。そうそう出会い系なんてあるもんじやない。それこそ俺みたく昔の友人がいない限り他校との接点なんて普通はないのではなかろうか。

「さて、今日もブレインストーミングから始めていこうか」

会議はつつがなく進み、日が経つごとに案も固まり計画は完成する。  
いよいよ——修学旅行が始まる。